



齋藤里香 (さいとうりか)

東日本大震災津波伝承館 上席専門学芸員。岩手県立博物館学芸員を経て、2017年より東日本大震災津波伝承館の整備に携わる。伝承館は2019年9月に開館。東日本大震災津波の事実と教訓を、国内外に発信している。



柳谷理紗 (やなぎりさ)

仙台市まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室主任。建築職採用。2014年より仙台市メモリアル等検討委員会の担当、せんだい3.11メモリアル交流館・震災遺構荒浜小の整備、現在仙台市で検討している震災メモリアル中心部拠点の担当など、メモリアル事業に携わる。居住している地区の町内会活動にも積極的に参加し、地域づくりに取り組む。



佐藤克美 (さとうかつみ)

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館館長。震災後は気仙沼市の災害廃棄物全般の担当をつとめる。2019年1月より現職。遺構・伝承館は2019年3月に開館。階上地域まちづくり振興協議会、階上中学校、東北大学と協働し、中学生の語り部養成などに取り組む。



瀬戸真之 (せとまさゆき)

福島イノベーションコースト構想推進機構主任学芸員。福島大学客員准教授、韓国 KyungHee 大学 Doctoral Research Fellow。専門は気候地形学、自然地理学、災害復興論。韓国東岸の活断層、三宅島噴火、新潟県中越地震、東日本大震災、熊本地震などを例に研究を進める。土木学会斜面工学研究小委員会委員などをつとめる。博士(理学)。



山崎麻里子 (やまざきまりこ)

3.11 伝承ロード推進機構事務局。中越防災安全推進機構に所属し、中越地震のメモリアル施設の一つ、長岡アーカイブセンターきおくみらいの整備と運営にあたる。2018年より現職につき、青森・岩手・宮城・福島の震災伝承施設のネットワーク、連携の強化を図る。



佐藤翔輔 (さとうしょうすけ)

東北大学災害科学国際研究所准教授。専門は災害伝承・災害文化、災害情報。東日本大震災の被災地では、現場での「実践的」な防災・減災・復興に関する研究に従事するほか、政府・宮城県内の自治体で、災害伝承や防災関係の委員・アドバイザーをつとめる。博士(情報学)。



東日本大震災から9年、被災地域では震災の経験と教訓を伝える活動が続けられています。本ディスカッションは、震災伝承に携わる者が集い、ビジョンとミッションを互いに紹介することで、減災社会、これからの地域づくりへの道標を共有することをめざしました。各自がこうありたいと願う社会に向けて、何を残し、伝えるのか。また、「ネットワーク」とは何か。広域にまたがる被災地域において、それを共有し、仲間となることの意義について対話がなされました。

災害と メモリアル 何を残し、伝えるのか

オープンディスカッション



FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

FIELD RECORDING

NAGAOGA
ASHIRAGAGA
新島
MITSUNOBU
TSUNAGI
Fukushima Museum

NAGAOGA
ASHIRAGAGA
新島
MITSUNOBU
TSUNAGI
Fukushima Museum

FIELD RECORDING 01

FIELD RECORDING 01

FIELD RECORDING 02

FIELD RECORDING



日時：12月26日(木) 13:30~16:30
 会場：せんだい3.11メモリアル交流館(仙台市)
 モデレーター：佐藤翔輔氏(東北大学災害科学国際研究所准教授)
 講師：齋藤里香氏(東日本大震災津波伝承館いわてT S U N A M Iメモリアル上席専門学芸員)
 柳谷理紗氏(仙台市まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室主任)
 佐藤克美氏(気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館館長)
 瀬戸真之氏(公益財団法人福島イノベーションコースト構想推進機構主任学芸員)
 山崎麻里子氏(3.11伝承ロード推進機構事務局)
 筑波匡介(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)
 司会：塚本麻衣子(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)
 協力：せんだい3.11メモリアル交流館



災害と
ミュージアム

オープンディスカッション

事務局・塚本麻衣子

お時間になりましたので、これからオープンディスカッション「災害とミュージアム何を残し、伝えるのか」を始めます。本日はたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。震災から9年が経とうとし、各地で震災を伝承する活動が始められ、続けられています。今回は災害を伝える、震災を伝える活動に携わっておられるみなさんに集まっていただき、これから何を残し伝えていくのか、または災害に、いわゆるミュージアムと呼ばれる施設がどう関わって、どう向き合っていくのか、そういったことをみなさんと共に考える場にできればと思っております。

配布した資料に付箋があるかと思えます。こちらに気づいたこと、質問、感想などをお書きいただきまして、休憩時間に事務局のスタッフにお渡しください。それではまずライフミュージアムネットワークという活動、事業がどういったものか、そして何をこれから目指していくのかを事務局の筑波からご紹介してまいります。

ライフミュージアム
ネットワーク

事務局・筑波匡介

みなさんこんにちは。事務局の福島県立博物館の筑波です。本日は年末のお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。今日はですね、ライフミュージアムネットワークのオープンディスカッションとして仙台で「災害とミュージアム」をテーマにみなさまとお話をしていきます。

まずは最初にこのライフミュージアムネット

ワークが一体何をやっているのかを説明します。ライフミュージアムネットワーク実行委員会が主催になっておりまして、平成31年度の文化庁の「地域と共働した博物館創造活動支援事業」として文化庁の支援をいただきながらやっています。ライフミュージアムネットワーク自体は「いのち」と「くらし」に向き合うミュージアムネットワークの構築と、福島におけるライフミュージアムの実践を掲げて昨年度から活動しております。昨年度もアートや表現、文化活動といったもので地域の課題解決をどのようにやっていくのかを各地で勉強させていただいてきました。その都度、ライフミュージアムネットワークを開いてみなさんと共有する場をつくりながら。昨年度の記録集、水色の冊子が後ろにございますのでぜひお持ち帰りいただければと思います。また地域活動だけではなく、例えば戦争ですとか、公害病といったことをどうやって伝えていくのか、その際に生まれた作品は何を伝えていくのかもみんなで勉強してきたわけなんです。

今年も、県内や県外のリサーチを重ねながらスタディツアーと今日のようなオープンディスカッションを重ねてきております。県立博物館でも成果展やフォーラムを計画しております。今年もスタディツアーとオープンディスカッションを組み合わせた事業として南相馬、浪江、奥会津、大熊を回らせていただいています。少し説明しますと、南相馬では「動物と震災」というテーマでスタディツアーを行いました。南相馬では原子力災害があつて避難せざるをえなくなったので、牛舎に牛が繋がれたまま残されたということがあつたんです。その牛たちは食べるものがなくなってしまつて、自分が

繋がれていた柱をかじっていたんです。そういった現場を見に行つて、牛舎で牧場主さんにお話をうかがつてきました。南相馬に戻つて生活は現地ですべてできているんですが、もう二度と牛を飼うことができなくなつていくということなんです。これは福島県立博物館の事業としてですが、我々はこの牛舎の柱のレプリカをつつて、こういった事実があつたということをお伝えすることもやりました。本当は災厄といいますが、災害を伝えるつもりでつくったレプリカなんです。この牛が齧つた事実を伝えることによつて、その先にある「いのち」が見えてくる。災害を伝えるつもりでつくったレプリカが、「いのち」を伝える資料になつてきているということも、ライフミュージアムを通して気づいてきたんです。また、南相馬には有害鳥獣焼却施設といつて、住民が避難されている間に猪の勢いが強くなつてしまつて猪を捕獲するようになり、捕まえた猪を焼却処分するためだけの施設がつくられていきます。ツアーに行く前日に「いのち」を取り上げている作家の方に集まっていたら、「いのち」とはそもそも何なんだっていうお話をしてからツアーに出ました。そもそも有害と

言いはじめたのは誰なんだとかですね、命は人間の都合で考えるだけでいいのかという話をしながら、こういったツアーを通じて考えるきっかけを得ている状況です。

「浪江・二本松の交流のこれから・これまでも」という事業も行いました。浪江から二本松に避難せざるをえない人たちがいる。避難生活も長くなってしまつと新しいコミュニティができてきます。一方で二本松でも元々コミュニティがあり、歴史があつたりするわけな

んです。二本松の人たちも浪江の人たちとコミュニケーションを取りたいし、浪江の人たちも新しく生活している場所に馴染みたい。そこで「食」をキーワードにして、二つの地域のコミュニティが融合するきっかけづくりをやつたんです。アーティストとしてパン人間というパフォーマンスをしている折元立身さんの食を通じたアート活動を介しながら、二つの町の接点が見つけられないかという取り組みもしてきています。

大熊町では「大熊町のDNA」というテーマでツアーとディスカッションを行いました。大熊町の場合、まだ帰還困難区域になつていて、さらに中間貯蔵施設も建つていて、まだまだ生活が取り戻せていない。その町の中でどうやって、元々あつた大熊の歴史を伝えていくのか、残していくのかつていう活動をされている方もいらつしやいます。フロタージュという拓本みたいなやり方ですけども、擦り取る作業をして、その場その場の情報を手を動かして複写するつていう活動をしているんです。ツアーではフロタージュの体験も通じながら大熊町が伝えるべきDNAつて何なのかを考える取り組みをしました。まだ現在進行形な場所であるのです。

奥会津には小さな博物館がいくつかあるんです。あるんですけど、連携して何かを一緒にするつてことが今までなかったそうなんです。そういった人たちが一堂に会して、一般参加者と一緒にと奥会津のミュージアムを回つてみる。そして、説明を受けてみるつていうことをすると、我々の地域と違うね、違うことを知ることから新しいことにもつながっていくのかなというようにことや、ネットワークと

かつながりってというのはやはり大切なのではないのかなということを考えながら、奥会津を回りました。

ソーシャルインクルージョンをテーマとしたディスカッションも行いました。我々の博物館も地域のみなさんに使ってもらいたくて、みなさんが集うような場でありたいと思っています。そのために、まず何をすればいいのかがよくわからなかったので、精神科の先生に来ていただいて、障がいとは何なのかを教えてください。そんなにも構えることじゃなくて普通にいいんだよっていうような話ですが、我々が知っておくべきことか、心構えみたいなことも教えていただいたり、話し合ったり。こういうことも重ねながら共有しながらやっています。

川内村では「奥会津から川内の未来を考える」というオープンディスカッションをしました。川内も原子力災害の事故によって避難生活があった地域です。今は帰ってきている人たちも多いんですが、これからの地域づくり、「コミュニティづくりをどうやっていくかっていうことを考えている地域なんです。奥会津の場合、只見川沿いの電源開発があって、ダムが開発によって生活が変わってしまうような状況に置かれたんですが、三島町というところは元々あった工芸、手を動かして生活で使うモノをつくる工芸をもう一度見返していこうという運動を行って、自分たちの地域磨きを一生懸命やっている地域なんです。そういった地域とこれからを考えている川内をつなげてみたところ、新しい考え方や気づきがいっぱいあった。

今年9月、I COM京都っていう国際博物館会議京都大会っていう大きな会議があったんですが、岩手の伝承館さんでは、私がつくったものを展示していただいています。ここにいる山崎さんと筑波さんは新潟県中越地震の後に中越で活躍されたお二人なんですけども、私自身中越出身です。瀬戸さんだけは初めてです。そんなメンバーなので一番中庸にいる私を「指名いただいたと理解しています。僭越でございますが今日進行させていただきます。」

前半が今日呼ばれた方たちがどんなことをされているかを知っていただく時間。後半は、みなさんのお話を受けての感想とか、疑問に思ったことを会場に参加していただいたみなさんからどんどんぶつけていただくことになっています。付箋がお手元にあると思うんですが、そこに文字がないと後半まったく時間が埋まりませんので、そこにドシドシ書いていただくのが、今日の前半に会場に来てくださったみなさんに「ご協力いただきたい部分になります。では、私の隣から順に自分たちがやっていることとの事例紹介していただきたいと思えます。では、仙台市柳谷さんお願いします。」

メモリアル交流館と震災遺構仙台市立荒浜小学校

柳谷理紗

はじめまして、仙台市役所の柳谷と申します。よろしくお願ひします。なぜ私が登壇しているかという、仙台市では本日会場となっている「せんだい3・11メモリアル交流館」と「震災遺構仙台市立荒浜小学校」を整備して運営しているんですが、私はその所管課にいます。施設整備前に開催していたメモリアル等検討委員会の担当から、このメモリアル交流館の

んですが、そこに先ほどの柱のレプリカを持つていったんです。行ってみると業者さんが多くて、我々も柱をつくるレプリカ屋さんだって誤解をされてしまった。相手は多国籍なんで何語で表現していいかわからなくて。日本語のバネルとか不要だったんです。そういうことも気づいたりして、世界に発信するってこういうことかと思っただけです。でも、足を止めていただいで説明を少しでもすると、「何ということだ」「この先に牛が見えるぞ」とかですね、色々話をしてもらって。これをきっかけに命とか、福島っていうことを考えていただけのようになったんです。この時に実は今日のイメージができていたんですけど、我々の館だけ出てしまおうって大失敗だったなと。もう少しユニオンというか、コンソーシアムというか、いろんな人たちと組んで東日本大震災のことをしっかりと伝えるべきだったのではないのかなということがこの頃芽生えたんです。そういう意味で、今日はみなさんとここで知り合いになって次につなげていきたいなと思っっているところなんです。I COM日本っていうのがこれから立ち上がるのかな、その準備も始まっているそうなんです。そういったところに向けて発信力をつける意味でつながっていききたい、みんなと一緒にやっていききたいなという思いもあるわけです。

今後としてはフォーラムを1月18日に「活かす・生きるミュージアム」というテーマで福島県博で行います。「いのちとくらしとミュージアム 記憶と人間の方舟として」というフォーラムも2月14日に行います。チラシをみなさんにお配りしてありますので、詳しくは見ていただければと思いますが、今年度はここ整備、震災遺構荒浜小の整備、現在市で検討している中心部拠点検討の担当など、このメモリアル事業に5年間関わってきました。各施設の現状は今の施設スタッフのほう把握していますが、市のメモリアル事業の全体の流れということで、私からお伝えさせていただきます。まず私自身なんですけれども仙台市出身です。この会場の隣の中学校区で生まれて、仙台市職員になって11年目です。建築職で入庁して、震災の当時まで4年間宮城野区役所で耐震診断の仕事をしていました。そのあと2012年に立ち上がった復興事務局で集団移転に関わりまして、国土交通省都市局都市安全課への1年間の出向を経て、2014年からメモリアル事業の担当になりました。このメモリアル交流館整備の時に当時、中越におられた筑波さんに中越の施設をご案内いただいたりしてお世話になっていて、その恩返しもあるかなと思っただけです。ここに来ています。

この場所に初めて来られた方もいらっしゃるかもしれないので、簡単に仙台市の被害の特徴をお伝えします。仙台市は、津波被害を受けたことももちろん、それ以外の大きな被害として内陸部でも約5,000宅地で地滑りが発生しました。宅地の被害、中心部の都市機能の停止、津波被害というような、場所場所特徴の違う被害が起こったところです。

震災後、仙台市では震災復興計画をつくってあります。市の基本計画を補完する形で復興計画を位置づけ、10の柱がある震災復興プロジェクトの一つとして「震災の記憶を後世に伝える・震災メモリアルプロジェクト」を位置づけました。震災のあとはずっと暮らしの再建を優先に事業を進めてきました。メモリアルの方

まで重ねていってですね、2月14日以降果たしてどうやって記録集をまとめるのかというのが残されてはおりますけれども、みなさんにご協力いただきながら、なるべく広くお伝えできるように活動を続けていきたいと思っています。このところでは、

これで事業紹介は終わります。もう一度言いますけど、「いのち」と「くらし」に向き合うミュージアムネットワークの構築と福島におけるライフミュージアムの実践ということをやりたいと思っています。以上です。

塚本

今回のディスカッションを主催しておりますライフミュージアムネットワークのこれまでの活動の紹介でした。さらに震災の伝承をされている方々と話を重ねていきたいなと思います。モデレーターは東北大学災害科学国際研究所佐藤翔輔准教授にお願いしております。どうぞよろしくお願ひいたします。

佐藤翔輔

改めましてみなさんこんにちは。今日はたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。主旨は筑波さんに言っていたいただきました。「いのち」と「くらし」というのがキーワードで、それを福島プラスアルファでつなげて実践していきたいというのがライフミュージアムネットワークの主旨ということになります。何で私がモデレーターになったかと言いますと、仙台市さんではこのメモリアル交流館と荒浜小のアドバイザーを仰せつかっております。気仙沼の佐藤克美さんのほうでは展示・運営等のお手伝いをさせていただ

向性を、検討委員会を設置し具体的に検討し始めたのが2014年です。その後2016年2月にメモリアル交流館が開館、震災遺構荒浜小は2017年4月に一般公開を開始しました。2019年1月には「中心部震災メモリアル拠点検討委員会」を設置し、仙台市の中心部でどういうふう震災を伝承していくかの検討を行っております。この8月から震災遺構荒浜小から海のほうにある住宅基礎跡を震災遺構として公開しております。今日の午前中は講師とライフミュージアムネットワーク事務局のみなさまに、震災遺構荒浜小と住宅基礎遺構をご覧いただきました。

何のため、誰に対し

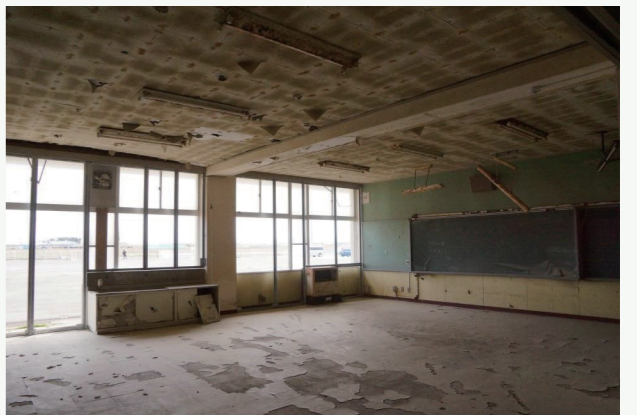
震災復興メモリアル等検討委員会の中で、何のため、誰に対し、何をやっていくのかということを議論しました。最初から「基礎理念」をつくろうとしていたわけではなかったのですが、議論を進める中で「哲学」が必要だろうという意見が委員会の中でありまして、最終的にまとまったのが、「震災復興メモリアルに込める願い」として、「時を経て、世代が替わっても 災害から命を守るために 仙台市民一人ひとりが 東日本大震災の記憶と経験を未来へ 世界へ つなぐ」という言葉になっています。これを大上段の目的としていきます。

そのために実施する3本の柱をつくって、被害を受けた「地域資源を引き継ぐ」という柱、「記憶と経験を形にする」というコミュニティや遺構の整備、アーカイブ。それだけでは過去向きだけになってしまいうから、それ

オープンディスカッション

災害とミュージアム

を文化芸術や、知り学ぶ機会をつくることにやり「明日へ向かう力を育てる」ということを柱としています。これらを実現するための事業を推進するためには、中心部と沿岸部に拠点が必要だという提言になっています。具体的な図式としては、東北宮城は交通等の利便性もありますので、中心部を「東北・宮城の玄関口」、そして「3・11」を収集、編集、発信する拠点」と位置付けています。この時点では拠点という言葉で、ネットワークなのか場所なのかっていうのは具体的には明言せず、提言は終わっています。みなさんがいるこのメモリアル交流館は、中心部より津波被災地に近い場所です。この先にある高速道路の東部道路を越えると、津波の被災を受けた地が、暮らしがあるわけですね。そちらのほうになるべく足を運んでほしい。津波被害の脅威だけではなく、東部地域の魅力自体も増えてほしいということで、沿岸部の拠点は「宮城・仙台東部地域への玄関口」、「3・11を知り学ぶ拠点」としてメモリアル交流館を整備。震災遺構等で津波の被害を受けた現状を知ってもらうというところで、震災遺構として荒浜小学校と住宅基礎の遺構を整備しているという役割分担をやっています。運営して3、4年経っているんですけど、この中でメモリアル交流館の目的は先ほど言ったような玄関口であるということ。震災遺構は被災校舎のありのままの姿と被災直後の写真と展示により来館者に津波被害を実感していただく、防災の意識を高めることを一義的な目的としているところです。メモリアル交流館を開館した当時、集団移転の宅地が引き渡される時期で、暮らしがようやく落ち着くというタイミングでした。この近くに被災されたみなさ



被災した地域の記憶を 何とか残せないか

んが暮らしている、毎日使う駅舎の1階に被災の写真などがあると精神的に辛いだろうと交流を目的としているメモリアル交流館に被災された方が足を運ばなくなってしまったのは終わりだなどということもありまして、1階は交流スペースとして津波被害を受けたその地域自体、東部地域の情報を伝えようと、あえて被災の写真は置きませんでした。現地を訪ねる手助けとして、沿岸地域の広がりや高低差がわかる木製立体マップや震災文庫を設置したり、震災前と後を紹介するスライドショーを上映しています。2階では常設展示と企画展示がありまして、まだ中心部拠点がない状態なので、こちらの常設展で震災の全体像を伝えてます。企画展は年に3回、4回開催しています。

津波で被災した地域の記憶を何とか残せないかというのが施設整備の過程で考えたことでした。ちょうど津波で被災した小学校3校が、統合や閉校のタイミングでした。その中の一つ、東六郷小学校の体育館が解体されるタイミングだったので、その床材を採取させていただきました。2階展示室の床材などに活用しました。企画展は年に4回ほど開催しているんですけど、震災の証言に焦点を当てたものであるとか、地域の暮らしに焦点を当てたものであるとかを実施しています。ただ運営を始めてみて、館の運営にマンパワーが割かれてしまってたので、企画展にかけられないという課題もあったので、企画展にかけられないという課題もあつたので、外に出

て地域のことに触れて紹介する企画を開催するというような事業のバランスを、メモリアル交流館の運営を委託している仙台市市民文化事業団の職員と話し合い、今も調整しながら運営しているところです。

この場所から海側へ3、4km行ったところにある震災遺構荒浜小のことも説明します。

津波で被害を受けた学校校舎は三つありましたが、そのうち仙台市が震災遺構として整備したのはこの荒浜小学校です。校舎2階の床上40cmまで津波が到達しました。震災当時、児童、教職員、地域の方を含め320人の方が避難して助かりましたが、ただ荒浜地区だけでも190名以上の方が亡くなっており、被災した地域のこと伝えながら運営しているところです。津波被災を受けた校舎1、2階では被害の現状を見ていただいています。立ち入

佐藤翔輔
ありがとうございます。仙台市の事業をコンパクトにまとめたていただいたんで、時間オーバーはやむを得ないかなと思います。ハードもソフトも良い意味で手数が多のが仙台市の特徴かなと思います。どうもありがとうございます。では次は、気仙沼の東日本大震災遺構伝承館館長の佐藤克美さんからお話をいただきます。

気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館

佐藤克美

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の館長をしております佐藤と申します。よろしくお願ひいたします。この伝承館は今年の3月10日にオープンしました。2011年3月11日には私は市役所の土木課で道路行政係の道路の許可担当をしておりまして。簡単に言えば横断歩道をどこに設置するか警察と協議するとか、お店の看板を道路に立てるとか工事を

する時に困いをするとかそういった工事の許可担当をしていたのですけども、3月11日の午後2時46分から瓦礫撤去の担当となり、昨年の12月までその担当をさせていた。その後、その後は伝承館の館長となります。気仙沼市の概要としては、ご存知の通り、2011年3月11日に死者が1,043人、行方不明者214名、この死者1,043名のうち私は瓦礫の中から約130名ほどの方を看取っております。色々な方がいらっしゃいました。震災を語るにあたって、どこで誰がどうなったかを覚えるように



を処理させていただいております。そして、今からご紹介する向洋高校の校庭に2次処理場を宮城県と一緒に作りまして、全体の処理量、1987万t、気仙沼市の1年間のゴミの量というのは約2万5,000tなので、約80年分のゴミを、3ヶ月ぐらいで全部焼却しました。

ここを残してほしい

震災遺構の検討は復興担当で進めていた。第18共徳丸という話もあったのですが、この階上地区の住民からの要望もあり、向洋高校は誰も亡くなっていない、ここにいた170名の生徒は全員2km先の階上中学校に避難をしていること、そして、ここに残った先生方、そして、工事関係者45名は屋上に避難をして、全員が無事だったということもあって、こ

災害と
オープンディスカッション
ミュージアム



こを残してほしいということで、この伝承館が完成します。

来ていただいている方はご存知だと思わんですが、うちの伝承館は2011年3月11日に何が起きたか、まず映像シアターで津波の映像を13分間見ていただいて、そのあとに校舎の中に入っていただく破壊された校舎、そして、3階には津波で流されてきた車、4階は津波の到達地点と言われているレターケース、そして、屋上は最終的に先生方が避難した場所、西側の外には引き波で5台ほどが折り重なった車、そして、伝承館に戻り講話室で被災者の思いとして梶原裕太くんの答辞などをフルバージョンで見てください。この梶原裕太くんの答辞は本当に素晴らしいです。2、000人の避難者の前で卒業式が行われました。当たり前の生活がいかに大切かを教えてくれます。

この伝承館は説明を聞かなくても自分たち

震災伝承ネットワーク語り部

階上中学校語り部



で感じていただければと思います。語り部ガイドは自分たちの当時の行動、そして、色々な思いを語ってくれます。だいたい、約1時間から1時間半をかけて歩いていただきます。伝承館のPVを作っておりますので、ちょっと見ていただきたい。

2011年、3月11日に発生した東日本大震災の大津波とその後の大規模な火災は気仙沼市に甚大な被害をもたらしました。ここ伝承館は、津波で4階まで被災した気仙沼向洋高校の旧校舎をありのままの姿で震災遺構として保存し、展示や研修会場を備えた伝承施設を併設しています。気仙沼市では将来にわたり、震災の記憶と記録を伝え、警鐘を鳴らし続ける目に見える証として活用し、津波死ゼロのまちづくりを指します。



伝承館の周りには9.8mの高さの防潮堤がつけられています。これが完成しますとこの上を歩ける。そして、この杉ノ下地区の慰霊碑がここにある。ぜひみなさん一度足を運んでいただきたいと思えます。最後に伝承としてですね、語り部の他に階上中学校の生徒が伝承活動を行っております。この子たちのうち3年生5人が11月24日に安倍総理大臣がここを訪れた時に、時間が決められている中できちり説明をこなして、みなさんから高い評価をいただいております。

佐藤翔輔

ありがとうございます。この3月にオープンしたということです。もともと向洋高校は震災遺構になる予定ではなく、第18共徳丸という船を震災遺構にすることが市長さん始め、市側のご提案だったんですけど、船の所有者の方のご意向もあって、そこは断念して。向洋高校は地域の方も、ぜひこれを残してほしいということになりました。今日あまりご説明なかったんですけど、震災遺構の隣には伝承館という付帯施設が隣り合っていて、相乗効果もあるのが気仙沼市さんの取り組みです。どうもありがとうございます。続きまして宮城を離れまして岩手に行きます。いわてTSUNAMIメモリアルの齋藤里香さんから、取り組みについて教えていただきます。

東日本大震災津波伝承館

齋藤里香

東日本大震災津波伝承館というのが岩手県の施設の正式名称です。通称、いわて



災害とミュージアム

TSUNAMIメモリアル。そちらで学芸員をしております齋藤と申します。よろしくお願ひします。こちらの伝承館、今年の9月にオープンしたんですけれども、私自身はこの事業に携わって3年目です。それ以前は岩手県の県立博物館、盛岡にありますけれども、そちらで長く学芸員をしておりました。

これは伝承館の外観です。まず基本的な情報からですが、場所は岩手県の陸前高田市、高田松原津波復興祈念公園の中にございます。展示面積は1,000平米ぐらいです。で、中クラスかな。福島県の立博物館ですと3,000平米近い展示面積があるかと思えます。常設展示室で2,000ぐらいではないでしょうか。そういうところに比べれば小さいです。開館時間は9時から17時まで。ほとんど無休でやっております。年末年始のお休みとメンテナンスのためのお休みが何日かです。



明が難しいのですが、公園自体の中に国営追悼・折念施設と、岩手県の東日本大震災津波伝承館があります。防潮堤に向かって伸びている線がありますが、そちらが折りの軸という位置づけで、追悼折念施設。右側の道の駅高田松原は陸前高田市で運営をしております。市と県と国と3者が協力しながら公園全体を運営している形になります。

私たちの伝承館は何をするところなのか

今回、「災害とミュージアム」というタイトルでお話をいただいておりまして、では、私たちの伝承館は何をするところなのか。東日本大震災津波伝承館の設置目的を条例に掲げております。一つには東日本大震災津波の教訓の伝承、二つめ、東日本大震災津波の発災から復興に至るまでの状況の国内外への発信。そして、復興支援に対する感謝の発信が大きな目的になります。岩手県では津波被害の甚大さを忘れないために、いわゆる東日本大震災のことを「東日本大震災津波」と呼ぶことにしています。これは県としてです。そういう使い方をしていくことを「紹介したい」と思っています。本日のミュージアムということで言いますと、博物館はそもそも資料を収集する、保管する、展示をする、それについて調査研究をするというのが基本的な機能としてあるんですけども、伝承館としてはその面はあまり触れていなくて、事実を踏まえた教訓を伝承することを目的としております。伝承館に関する条例は館が建つ時につくったものですが、それ以前2018年の1月にミッション・ステートメント

トというものを定めました。館の基本的な考え方がありようを明文化したほうがいいのではないかとつくづく感じております。お手元にお配りしているいわてTsunamiメモリアルのパフレットの表紙に書いてあるものです。私たちは何をするのか迷ったらこれに帰ろうということで職員たちはやっています。

日本列島は、地球上でも特に自然災害の危険性が高い宿命の地であり、この地に生きる私たちは、長年にわたり自然災害への対応力を高めてきました。しかし、2011年3月11日に発生した東日本大震災津波により、私たちは多くの尊い命を失いました。この悲しみを繰り返さないためには、知恵と技術で備え、自ら行動することにより、様々な自然災害から命を守り、そして、自然災害を乗り越えていくことが重要です。東日本大震災津波伝承館は、先人の英知に学び、東日本大震災津波の事実と教訓を世界中の人々と共有し、自然災害に強い社会を一緒に実現することを目指します。そして、東日本大震災津波を乗り越えて進む姿を、支援への感謝とともに発信していきます。

繰り返さないためにはどうするか

三陸は昔から津波災害が繰り返されてきた地域で、津波被害に対応する力を付けてきたんだけど、それでもすく多くの犠牲者を出してしまっただけで、繰り返さないためにはどうするかをみんなで考えていきたいと思います。展

示のテーマは「命を守り、海と大地と共に生きる」。二度と東日本大震災津波の悲しみは繰り返さない。東日本大震災津波を伝承することによって、未来の命を守り、この土地でどうやって生きていくかということと一緒に考えていきたい。展示自体も、まず歴史を紐解く。そして、事実を知る。教訓を学ぶ。復興を共に進めるという構成になっています。

館内の様子をご紹介します。入り口は道の駅のエントランスもかねておりまして、24時間使用可能なトイレや、地図などがあります。奥に進むとゾーン1「歴史をひもとく」。右側のほうに津波災害の年表があって、下には地層の剥ぎ取り標本があります。東日本大震災の時に千年に一度ということがよく言われたんですけど、何千年に一度かかって実はみなさんよくわかっていない。津波災害ということ



に絞れば数十年に一度ぐらい被害を受けている。千年津波が来ないわけではない。そういうところをまずしっかりと見ていただいて、感覚として津波は来るんだということをまず知っていただく。どういう対策をしてきたかという歴史を振り返るコーナーもあるんですけども、それを見ていただいて、「事実を知る」では、そういう被害がありました。「事実を知る」では、まず津波の威力を伝えるものを展示しています。橋げたが折れ曲がっています。奥のほうは消防自動車。津波でひしゃげているということもありませんが、消防団の方の犠牲がとて多かったので、そういう意味でも象徴的な資料として展示をしております。それから、データのなままとめ、証言を紹介するコーナー。震災前後の写真を紹介するコーナーなどもあります。奥に見えるのが震災遺構のタビック45。展示

室からも見通せるような構成になっています。岩手県には沿岸に12市町村ありますが、沿岸各地を津波の映像に特化して紹介していくコーナーから、進んでいくと、こちらで「教訓を学ぶ」というゾーンになります。その時、人々はどういう行動をしたのかという客観的な事実があります。特に消防団の方ですか、自衛隊、医療、警察とか。あとは遠野市が当初から自分たちは後方で支援するとすい取り組みをされていたんですけれども、そういう遠野市の人々の取り組み。国土交通省の東北地方整備局。津波災害で寸断された道路を開いていったこと。道路を開かないと病院にもたどり着けないということで大変な苦労があったんです。そういうことを紹介している。全体としては備えが重要であったこと、想定外の大きな被害だったけれど、それ以前に宮城沖

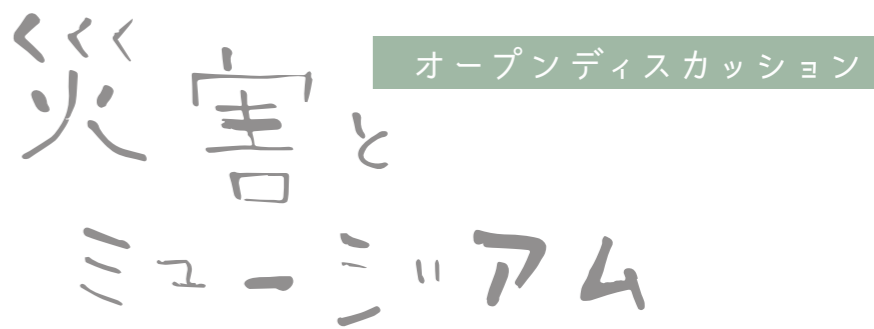
地震を想定した訓練などを繰り返してきているので、そういうことが役立ったことを描いている。このコーナーでは発災から5年ぐらいの岩手県の歩みを時系列でたどっています。最後に避難の重要性を考えるコーナーがあります。まとめとして「教訓を学ぶ」の最後は「未来をつくる」で、未来に向かってどうしていくかを考えるコーナーになっています。まずはこんなところでは

地震を想定した訓練などを繰り返してきているので、そういうことが役立ったことを描いている。このコーナーでは発災から5年ぐらいの岩手県の歩みを時系列でたどっています。最後に避難の重要性を考えるコーナーがあります。まとめとして「教訓を学ぶ」の最後は「未来をつくる」で、未来に向かってどうしていくかを考えるコーナーになっています。まずはこんなところでは

ありがとうございます。最初の二つの施設は「市」のものなんですけども、今度は「県」が出てまいりました。国と県と陸前高田市との連携があるのが特徴的です。なので、展示の内容も県全体だったり、国のものもあるというのが陸前高田の伝承館の概要かなと思います。ありがとうございます。では、また県を飛び越えまして、福島ですね。福島イノベーションコースト構想推進機構の瀬戸さんからご紹介いただきます。

瀬戸真之

福島イノベーションコースト構想推進機構の瀬戸です。よろしくお願いたします。元々斜面を研究する人間でして土砂災害などが本来の専門です。最初の災害の現地調査は三宅島で、2000年に三宅島は火山の噴火があったので全村避難をしているわけですね。私は自然科学が専門なんですけど、社会科学の専門家も一緒に調査に行っていて復興のプロセスはどうなっているんだろうねという話がありました。ご存知の通り三宅島って島ですから完全に閉鎖した状態で長期避難が5年間続いたわけです。





A) 汚染傷病者搬送用シート B) 原子カテープ C) 津波の痕跡が残る戸板
D) 個人線量計 (単位: mSv/h) E) 津波で潰れた消防車

災害伝承館

福島県が今やっている仕事を紹介したいと思います。福島県は東日本大震災原子力災害伝承館というものを整備している途中です。この伝承館の資料収集を福島大学が担当しました。私は当時福島大学におりまして、その担当者になりまして資料収集を2年ほどやりました。今年、福島大学から財団に移りまして、関わって3年目なんです。どんなものを集めたかという、例えば、汚染、傷病者搬送用シート、原子力のマークがついたテープ、津波の痕跡が残る戸板。個人線量計。これは単位がミリシーベルトなんです、マイクロシーベルトじゃないんです。これは県の施設にあったもの、おそらくシビアなコンディションを考えてこういった単位だったと思うんです。津波で潰れた消防車。潰れている方が消防車前面ですね。



A) ホールボディカウンター B) 通行許可証
C) 一時避難した場所の黒板に残されたメッセージ D) 個人の日記

原子力災害は目に見えない

原子力災害被災地で資料を集めていたわけなんです、ここの特徴としては、まずもって目に見えないんですね。原子力災害は目に見えない。被災者としては納得できない。この家は危ないから逃げてねって言われてもどこも壊れてない。納得しがたい。非常に広範囲で大勢に影響がある。あるいは超長期に渡って故郷を失う。場合によっては地域崩壊の危機が生じる。ここに行政の方もいらっしゃるの、遠慮気味に言いたいんですが、行政はどちらかという復興の際にスクラップ&ビルドを考へる傾向があるように見えます。一研究者からはそのように見えます。他方で地元

東日本大震災原子力

その復興を調べていくうちに新潟県中越地震が起こりまして、山古志村が全村避難になりました。その時はですね、地すべり学会の先遣隊員として斜面災害調査に入ったんですけれども、はたと考えるんですね、山古志村も、ある種類閉鎖した空間の全村避難ということで、三宅島と少し通じるものがあるんじゃないのかなと考えていました。三宅島は完全に閉鎖空間なんです。山古志も交通が特によいというわけではないので、似通っている部分あるのかなと思って研究をしていたところに、東日本大震災が起こりまして、長期広域避難が生じた。これまでの研究の経験が活かそうだとということで、2013年から福島大学にまいりました。その後、若手との縁がありまして山田町、大楸町で震災記録誌をつくらせていただきました。

前の災害の経験を活かせたかどうか

住民は新しいのはいいんだけど、元通りにしてほしいと。むしろ、リコンストラクションを考えて欲しい。そこに少し乖離があると考えつつも、リコンストラクションは難しいのかな、でもそうやってほしいなと思っています。

そこでアーカイブズに何が期待されるんだろうということなんですが、原子力災害や長期広域の避難についてはこれまで経験がありませんので、海外に発信することが期待されるんじゃないかと考えております。私の考えとしては、災害アーカイブズにまず期待されることは、前の災害の経験を活かせたかどうかの検証が求められるだろうと。全村避難をしたのであればですね、伊豆大島、三宅島、山古志の経験が例えば福島で活かされたのだろうか。津波であれば三陸沿岸の例えばチリ津波の経験が活かされたのか、原子力であればチェルノブイリの経験は活かされたのかということの検証があるんじゃないのかなと。後はですね防災形成につながる災害経験の蓄積とか発信が期待されているんじゃないのかなと考えている次第です。

佐藤翔輔

ありがとうございます。最初の三つの事例紹介は、「施設」としてすでに活動している話だったんですけど、瀬戸さんからのお話は「施設」ではなくて、震災の記録という活動を続けてこられたというお話でした。しかも、とても難しいのは、目に見えないものをいかに捉え

3・11伝承ロード推進機構

山崎麻里子

3・11伝承ロード推進機構の山崎と申します。冒頭のご紹介にもありましたように昨年の10月までは新潟県にあります中越防災安全推進機構に勤めておりまして、中越地震のメモリアル施設の一つ、長岡震災アーカイブセンターを担当しております。こちらの整備と運営を8年間やってきたんですが、昨年の12月、東北の震災伝承のお手伝いをさせていただきたいと思ひ、仙台に引越してきました今の仕事

中越メモリアル回廊



をいただいています。先日の10月23日の中越地震からちょうど15年が経過したところなんです。中越地震の被災地には四つの施設と三つのメモリアルパークが整備されています。3年前に発生した熊本地震の被災地でも震災ミュージアムの構想が進んでおりまして、益城町、西原村、南阿蘇村、そういったところで現場を保存しながら、熊本県の方がネットワークを組んで、熊本地震の記憶の回廊を整備していく準備が進んでいます。いたるところに地震による断層が残りましたので、例えば東海大学阿蘇キャンパスの施設などを残していくということもされています。

東北にはそういった遺構、施設そして活動団体がたくさんある

中越や熊本の現場保存や施設の整備が進んでいる中で、東日本大震災でもたくさんの方々が整備されています。例えば釜石市鶴住居には、「鶴住居トモス」という施設が整備されています。その中に「いのちをつなぐ未来館」があります。当時ここには防災センターが立っていた。その跡地にこういった防災教育に触れていた施設が整備されています。当時鶴住居にありました釜石東中学校の子どもたちが自分たちの日頃の訓練を元に地震が発生した後ちゃんと高台に避難して、近隣にある小学校の子どもたちの手を引いて避難してみなさん助かったという事例もあります。その子どもたちの避難経路を実際に来訪者が体験してみる。プログラムも用意されている施設です。その他に

3・11伝承ロード

当初、国土交通省と青森県、岩手県、宮城県、仙台市、福島県さんが入った震災伝承ネットワーク協議会が立ち上がりまして。4県1市が県境を越えて震災伝承施設のネットワークを構築して、東北一丸となって伝承して行こうというの大きな目的でありました。細かい動きというのは行政がつくった協議会の中だけでは動きにくいということもありましたので、具体的に実行していく法人が必要なんじゃないかという提言もありまして、今年の8月、3・11伝承ロード推進機構が発足されています。震災伝承ネットワーク協議会が東日本の沿岸域にある震災の展示施設や震災遺構、石碑などを「震災伝承施設」として募集、登録し、それを3つに分類をした上で活動や広報のお手伝いをしていくというものになっています。今、



オープンディスカッション

約200件の登録が行われています。登録されている施設のみなさんがそれぞれ単独で頑張っているんだけど、隣の施設って何してるんだろ、どういう案内してるんだろっていうのを、もちろん聞きに行けばそれで終わることなんです。自分たちだけでは動きにくいということもありませんので、そういったお手伝いをまずはしたいというのが一つです。さらにはこの東北の沿岸域を見に行ってみたい、教訓を学びたいという日本中の人たちがたくさんいらっしゃると思うんですが、旅行会社に聞いたらきつといいところを提案してくれるかもしれないけれども、もっと掘り下げて自分の興味関心のあるところとつないで欲しいと思っています。そういう方がきつというんだらうと思っていますので、そういった方と現地を繋ぎたいというのが一つ。そして、最後に地域の人たちが一生懸命震災を伝えたいという思いで活動されていますので、そういった活動の場をどんどん提供していきたい。この三つをこれから進めていきたいなと思っています。

佐藤翔輔

ありがとうございます。二つのネットワークを経験してるのが、山崎さんになります。一つは中越地震でのメモリアル回廊というネットワーク、もう一つはこれから始まる東日本大震災のネットワークですね。実は全然性格が違いまして、新潟県中越のほうは準備の段階から全体としての設計をして「ネットワーク」になっているのですが、東日本大震災はこれだけ被害が大きいですし、エリアも広いので最初からデザインすることは難しいわけですね。なので、ボトムアップで、これからネットワー

クがうまくいくかもしれないのが東日本大震災ということ。二つはその方向性・スタート地点が大きく違うと思います。どうもありがとうございます。前半はですね、みなさんがどんなことをされていたかを「知る」というのがメインです。筑波さん始め、ライフミュージアムネットワーク、福島県立博物館のみなさんに今回企画を立てていただいているわけですが、今日は代表して筑波さんに前に立っていただいています。お話を聞いたらうで、もうちょっと深く聞いてみたいなとか、ちょっとわからなかったなっていうところがあれば、質問をぶつけていただきたいと思います。

地域振興のために

筑波

私自身が中越でやってきていて、中越の時には震災伝承よりも、地域を活性化しようっていうところが一番にあるんです。地域振興のために施設をつくったところがあるんです。それは何故かという復興計画の前に中越大震災復興ビジョンっていうのがあって、それは復興にかかるといって、みんなが共有していく。10年後にはこういう未来になっていようっていうビジョンをつくったわけなんです。それに向かっていたので震災伝承っていうやり方と違うのかもしれないんですけども。齋藤さんのところの基本理念で「命を守り、海と大地と共に生きる」ということがありましたが、地域のことをしっかりと過去のことと学びながら未来につなげていくってすごく大事ななところがあるんです。そういった意味で、今未来をつくっていくために一番意識されている

こととか、例えば子どもになるのかな、招いていくために意識されることとかあればちょっと教えていただきたいなと思うんです。

地域のことはなるべく地域の人のために

齋藤

子どもたちに学んでいただきたいっていうのはもちろんあります。そして、地域のことはなるべく地域のの人たちに興味関心を持って取り組んでいただきたい。そのことを考える気持ちみたいなものを館の展示を通して、館の運営を通して与えられるといいのかなと思っています。なので、これからの事業展開のために、今日も色々なことで学ばせていただいて、こちらも教えていただきたい。全然答えになってないですけど、いいですか。

佐藤翔輔

陸前高田の伝承館のミッション・ステートメントではそういうことがあるわけですが、みなさんの館がこれまで活動している中に実は地域振興は入ってるんですね。その紹介をしていただきたいと思います。発言できる方からどうぞ。

地域の方々が語り部を

佐藤克美

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館について、先ほど先生に触れていたいただいた伝承施設では、まず津波はどういうものかについてパネル展

示などをしていて、最終的には遺構の中に入っていたら、当時のありのままの姿を見ていただく。向洋高校を残してほしいと言った方々、地域の方々に語り部を率先してやっていただいている。向洋高校に入って説明をする時の、その方々の一番の持ち味というのは屋上なんです。屋上に上がるとその方々は当時の自分の体験を話してくれます。あそこで私はこういう行動をしていたか、あそこには私の家があった、あそこでお父さんに気をつけて行ってねって車で見送ってそれっきり会っていないなど、そういう話を語り部の方はします。

語り部さんと、先日平均年齢何歳だろうかって話をしていたら、60、いや、70、80だよって言って、結局70歳にしようって話になったんですけど、70歳から下がいない。そこで、階上中学校の菅原校長先生に相談し、中学生に話をしてみたら語り部をやってみたいと。じゃあ、やってみようかということ。ここにいる佐藤翔輔先生にプログラムを組んでいただいて、地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちが一生懸命、一致団結して子どもたちを盛り上げています。ですので、地域をまとめるためにはそこにいるおじいちゃん、おばあちゃん、その地域の方々をいかにこの伝承館に呼んで、簡単にお茶っこと飲みでもいいんですよ、そこで色々な話をし、そこから広げていくことが大切と私は思う。地域の方々がいかに伝承館に足を運んで私たちと対話するかということが大切だと思います。

どこで結び目をつくるか

柳谷

今の質問は、キーワードとして「地域振興」

ということと、「未来につなぐ」ということだと思えます。中越の場合だと、中山間地における被災であり、観光が復興することも重要なことだった。そしてメモリアル回廊に位置付けられている施設が、各集落に、それぞれの特徴を持ちながら、整備されたと感じています。例えば山古志とか、その集落地域が持つ元々の課題や魅力を踏まえながら震災伝承の意味を追加して整備し、その地域の交流の核ともなっているといるんです。仙台市の文脈だと、「義的に言う」と「震災を伝える」ということが先に来ってしまうので、その地域の人がそもそも持つ地元の思いと外から来た人が知りたいこと、どこで結び目をつくるかというバランスを悩みながら整備をしてきました。

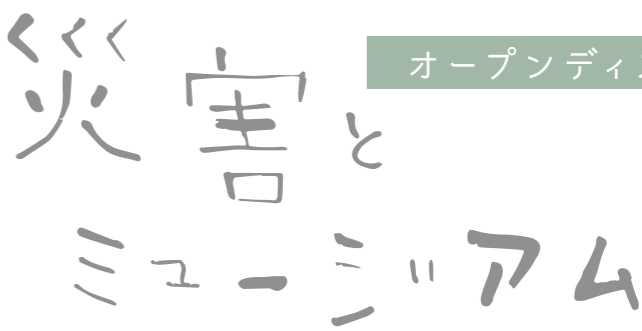
地元の人と出会うような場づくりを

仙台平野はまっ平でずっと農地が続いているような地域に見えるんですけども、個々の集落で持つてる思いとか、成り立ちとか、住んでる人の特性も違う。例えばメモリアル交流館には是非来てほしいと考えると、暮らしの場所はそれぞれの地元にある。メモリアル交流館は若林区に位置しますが、宮城野区の人にとっては「あそこは若林区の施設だから」と言われてしまって、なかなかなじみがある場所になりにくい。この場所を交流館と名付けていますが、伝えたい対象は仙台市の沿岸地域と考えているので、沿岸部に暮らす方々にとって縁遠い施設になってはいけないとは思っています。

メモリアル交流館の企画のなかでは、各地域の暮らしに焦点を当てた展示であったり、外に出て例えば貞山掘で写真の撮り歩きをしたりとか、バスツアーで現地に行ってみるとか、荒浜小学校と一緒に組んで企画を行うとかが、地元の人と出会うような場づくりを意識し、沿岸部に住んでる方にもご協力いただきながら企画を実施しています。

場所としての良い開き方

市としては、荒浜小学校を震災遺構として津波の驚異や教訓を伝えることを目的に整備しています。ただし、震災当日に発生した出来事だけではなく、震災前の街を知っていただかなければ、もともとそこが更地だったように見えてしまうし、そこに人々が暮らしたこと、も知ることができないと奪われたものの大きさを感ぜてもらえない。被害の大きさを伝え再び同じようなことを繰り返さないため、教訓を伝えるために、震災前のことも扱っているという文脈で整備はしています。荒浜は約400年の歴史があります。荒浜地区には浄土寺さんというお寺が元々あって、小学校もその寺子屋から始まったと言われ、約1400年という仙台の中でも長い歴史を持つてる小学校でした。その時間だけこの地域や小学校には記憶がある。お婆さんの代から孫まで代々その人たちにとっては母校である。お墓参りの時であるとか3月11日には、普段は行けないけれども、再び元々の住民の方が荒浜小学校に集う機会がある。そういう時に悲しい思いをさせないように、どういふふうを迎え入れら



れるかということを現場スタッフと話し合いながら。いろんな考え方があってですけど、どうするのが場所としての良い開き方なのかっていうことを試行錯誤しながらやっている。それが荒浜小学校の地域とのつながりですね。未来につながる方向については、やはり特に仙台市内の小学生に来てほしいと考えています。震災遺構としての荒浜小学校は2017年4月に一般公開を開始しましたが、公開開始から2年目、3年目と経つとリピーターの小学校も増えてきました。例えば修学旅行生だと岩手の小学生も多いのですが、震災遺構の他に水族館とか、街中も含めたルートで仙台に修学旅行に来る。では、特に伝えていきたい仙台市内の小学生に対してはどうするかと考えた時に、私たちの担当部署で市内の校長先生たちが集まる校長会のなかで、荒浜小学校とメモリアル交流館をセットで回れますよ、農業センターでお弁当食べますよというようなことを紹介するなどしました。ただわかってきた課題が、小学校のバスの予算がなかなか確保できないということでした。なので、市の教育局で訪問のための予算を、段階的に予算化するというようなことなどをして小学校に働きかけています。

佐藤翔輔

ありがとうございます。お二方がおっしゃらなかったことを私の方から補足します。ここ(当日の会場)の名前はメモリアル「交流」館なんです。仙台市と気仙沼で全然違うのは、仙台市では「遺構」とこの施設を剥がしていることになります。気仙沼は「くっ付けている」ことになります。これは良いところ悪いところがあります。離れることの良さは遺構

という、ある種厳粛な空間をきちんと別途残

して、ここ（会場）は交流を促そうと差別化を図っていると。私はこのアドバイザーを仰せつかっていて年に3回か4回活動の報告をいただくんですけど、メモリアル交流館の市民利用は活発です。市民の方がこのスペースを使う頻度が非常に高くて、まさに交流館という役割を果たしています。気仙沼市はちょっと驚きの戦略をしていて、つい先日、隣に公園ができました。公園という陸前高田の公園のイメージがありますが、そうではありません。「子どもに寄せた遊具だらけの公園」が震災遺構の隣にあります。これかなり攻めていて、私は良いことだと思ってます。今度目の前にはパークゴルフ場までできるんですね。一見するとおかしんじゃないかというご意見もあるかもしれませんが、中長期的な視野で行くと戦略としてありだと考えています。どちらも地域振興をとっても意識されると私は思いました。ありがとうございます。じゃあ、もう一つ質問お願いしていいですか。

連携を意識してること

筑波

山崎さんの話の中で連携する仲介役みたいなことがあったんですけど、実際に他の施設とか、他の業種とか、連携を意識してることで何かありますかね。たぶん山崎さんが言われているってコンシエルジュ的なことかなと思っただんですけど、そういうことへのヒントにもなればいいかなと思いますし、連携してる他の施設とか、他の業種とかがあれば教えてもらえれば。

旅行者さんに行っても「有料なんですよね、あつちは無料なのに」っていうところで。3・11の山崎さんの企画の中にうちが乗っかるのか、乗っからないのかもわからない。乗っからなかったらどうしようとか、不安しか残らない。だから、連携よりも今は不安しかない。ぜひ、連携というか、無料にはできませんけども、何でもしますからみなさんと混ぜてくださいというか、はい。お願いですね。岩手県のほうは知識が見られる、うちのほうは物が見られるっていうところがあるので。そしてお互いに30分で行き来できますよとか。

佐藤翔輔

近いですもんね。

佐藤克美

南三陸も施設をつくるという話ですから、そこも連携というか。パンフレットを置くだけで連携ではないと思うんで、どうやっていくかというのは山崎さんよろしくお願いします。

佐藤翔輔

連携の有無を聞いたんですけど、悲しかったのは僕のところ（東北大学災害科学国際研究所）と連携してるはずなのに「発言がありませんでした（笑）。この伝承館は気仙沼の階上地域というところにありますが、一番直近の連携先が地元のまちづくり協議会。さつきから何度か名前が出ている中学生は階上中学校。そして私も東北大ということで、気仙沼の施設は地域共同プラスアルファ運営をしています。こういった施設はあんまりないかなと思っ

佐藤翔輔

連携の有無からですね。まずあるか、ないからですね。じゃあ、瀬戸さんから行きましょか。

東日本大震災の全体像

瀬戸

連携はですね、私どもは沿岸の市町村さんですね、例えば双葉町さん、大熊町さん、それから浪江町さんなどと連携を図っているところですよ。それから資料の保全方法については福島県内の他の館の保存科学担当の学芸員さんのご助言をいただいたりしています。いずれにしても、私どもだけでは立ち行かないことは目に見えているので、他の施設との連携が非常に重要かとは思っています。それは運営上もそうですし、ミュージアムとして東日本大震災を描き出す上で、福島なら福島のことを見れるんですが、それでは全体像が見えないので、岩手、宮城、福島のミュージアムが連携して東日本大震災の全体像を見せていくのが理想ではないのかなというふうに思ってます。

佐藤翔輔

今おっしゃった沿岸の市町村との連携、その具体的な中身って何になるんでしょうか。

瀬戸

こちらは資料収集を担当してきましたので、資料のご提供でありますとか、資料の情報提供ですね。そういう面でのご協力いただいています。それから言い忘れましたが、ピラを撤いて個人からもかなりたさくんの「ご協力をいただき

それ言ってほしかったんです。「仲間」と考えています

佐藤克美

すいません。それが連携かっていうと、うちの方ではそれを連携って考えてなくて「仲間」と考えています。チームとして考えています。だから、コンビネーション遊具を市でつくったんですが、それを主導してもらったのはまちづくり振興協議会であり、これからここを見届けるのはみなさんと一緒という気持ちで、ラグビーで言うワンチームっていうんですか、仲間として捉えているので、それを連携という言葉で私は考えてなかったんで、すいません。仲間です、よろしくお願いします。

佐藤翔輔

仲間でした。はい。確かに連携だどちよつと外見（そとみ）な感じですね。「一緒にやってるんです」ということが大事だということですね。どうですか、仙台市は。

被災各地を

どうつないでいけるか

柳谷

そうですね。今の話を聞いたから思ったことですが、確かにメモリアル交流館整備の過程では、在仙のクリエイターのチームのみなさんに設計や企画、デザインしてもらいながら一緒に整備したり、東北大さんにアドバイスいただいたり。荒浜小も整備する前に、地元の方が震災前の写真を集めていたから、それを

てる次第です。

佐藤翔輔

イノベーションコーストさんが福島県を横断してような、そういった組織になってるんですね。ありがとうございます。じゃあ齋藤さんのほうではどうですか。

連携ってなんだろう

齋藤

いつも連携ってなんだろうって、連携連携って誼い文句はもちろんあるんですけど。今おっしゃったような、資料の情報提供の呼びかけとか、そういうことはやってきましたが、具体的に一緒に事業をやっているようにもなっています。館としては今からなのかなという気がしています。県としては今年三陸防災復興プロジェクトをやっています。連携って言うのは簡単なんですけど、何をもって連携したって手を振って言えるのかということなのかなって思っているところです。

佐藤翔輔

克美さんに行きましょか。そもそも連携があるかないかですね。

佐藤克美

今、齋藤さんが言った連携って何だろうなっていうこと。どういう連携を図っていますかってよく聞かれます、みなさんそうだと思います。当館は有料施設で、そこに年間7万5,000人集めるという使命感の中で、連携をどうしているのがまったくわからない。

借りしながらつくることができた。仙台市はNPOも多いので、地域の記憶を掘り起こしてくれていて、私たちはいろんな知恵をいただきながらつくることができたと思っています。なので、一緒に汗をかく仲間ということであれば、腑に落ちます。あとは中心部拠点のあり方について、翔輔先生にも委員に入っていたいただいて議論してるんですけども、東日本大震災の被災各地をどうつないでいけるかっていうことも中心部の役割の一つとして言われているところなんです。ただ連携って言っても、じゃあ何を以てつながっていくのかって、その施設とか拠点であるとか役割によって違ってくると思うんですね。仙台市の中心部で進めるにはやはり東日本大震災の全体像を捉えたい。ただどういふうにやっていくかっていうのは、難しい課題だと思っています。

佐藤翔輔

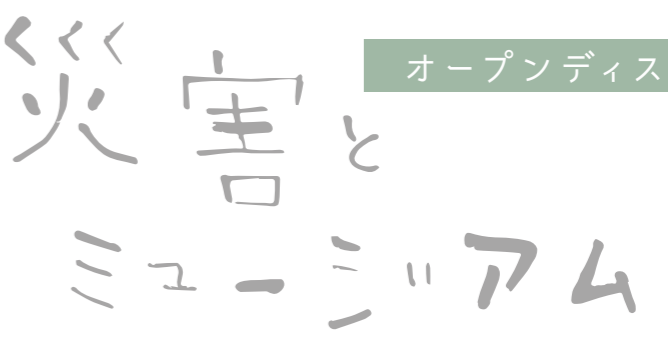
今のを受けて山崎さんどうですか。何かしら、感想なり、反論なり、意見なり、賛同なり。

一緒に歩いてくれる

山崎

長岡でやってる時もずっと連携しろ、連携しろと言われ続け悩んでいたんですけど、私も連携って何なのって思っていました。克美さんのお話を聞いて納得したのが、仲間づくりなんだなと。すごく腑に落ちたので、私は今日それで満足です。仲間っていうか、協力者というか、あることに対して一緒に汗をかいてくれる、一緒に歩いてくれるっていう、そういう人を増やしていくことなんであって、連携っていう堅苦しい感じ

オープンディスカッション



で物事を考えなくていいんだと思いました。

筑波

そうなんですよね。何か目的があって、何かをやるために一緒に手を組んでくれる、肩を組んでくれるのを僕は連携だなって思っていて、僕の説明が足りなかったなとは思ってますけど。そういう意味で肩を組んでいくというか、一緒に手を取り合っていく仲間というような。

接着剤の役割

佐藤翔輔

今、たまたま関係者が登壇者にはいないんで代わりにご紹介しますが、東北で申し上げますと3・11伝承ロード機構というどっちかという箱をつなぐようなお仕事と、3・11メモリアルネットワークというものもございいます。3・11メモリアルネットワークは箱をつなぐというよりも個人とか、活動してる団体、人をつなぐというそんな取り組みをしていて、もうつくられて2年ぐらい経ちます。その中で一つだけ見えてきた連携の形というのがあります。たくさん寄付とか助成をいただいている関係で、複数の団体でやってみたくてあります。つい先週審査があったんですけども、20件ぐらい応募があって、その中に私たちがだけじゃできないから、他のところと一緒にやりたいですっていう応募が7割ぐらいありました。ちゃんと公募の趣旨を組み取って、他の方と仲間と一緒に出しますっていう動きが増えてきたと思います。

あと思うんですけど、仙台市、気仙沼市、岩手

災害と コミュニケーション

の3者は、「当事者」になるわけです。当事者は、なかなか気づけないものだと思います。悪い意味で言ってるわけではないです。「一生懸命走っている」ので、他とどうなったらいいのかわからないの当然なんですね。だから連携したり、一緒になる上では違う視点で見てくれる、私はコンシエルジュではないと思うんですけど、そういう視点を持った方がいないとくっ付かないのかなと思います。だから、そういう接着剤の役割というのはたぶん「本人たちじゃないと私は見えています。前半はここまでとしまして、3時半から再開したいと思います。それで休憩になります。

海外の方への発信

佐藤翔輔

では、後半これから1時間、会場のみなさんと一緒に考えていきたいと思います。今の休憩中に、たくさんコメントや質問をいただいております。私、読み上げるのですが、それを書いたの私だとぜひ名乗っていただければと思います。まずライトなものからいきますね。「海外の方への発信はどうしてますか」と。「ホームページとか、展示施設とかは英語がないようにみられるんですけど」。書いた方なたでしょうか。「本人の口からどういう意図でのご質問か。ありがとうございます。

参加者 A

こないだ海外の方をお連れする時があった、メモリアル交流館とか荒浜小学校にすごく興味を持たれていた。博物館が専門の方なんですけど、他の施設も見たいと言っていたので、帰っちゃっ

ありがとうございます。じゃあ、気仙沼はどうでしょうか。

佐藤克実

気仙沼市の場合はこのリーフレットを、英語、中国語、韓国語、インドネシア語に翻訳して、それはホームページには載せていたはずですが、すいません、目立たなかったと思いますので大変申し訳なかつたなど。経路についても日本語と英語で仙台空港からの経路図も載せております。そして、もう一つですが、うちのほう荒浜と同じように生粹の日本語しか喋れない職員しかいない。

佐藤翔輔

生粹の日本語。

佐藤克実

生粹というか、方言ですね。気仙沼弁しか喋れない。ちょっと仙台留りが何人かはいいますが、ほとんど日本語というか、方言しか喋れないものですから。通訳が来ていない場合は必ず私が呼ばれます。そして、私のこのケータイが威力を発揮します。これですべてポケットク状態になります。ポケットクも常時していますが、Wi-Fiが通じるのが伝承館だけで、遺構の中は通じないの。あともう一つ、このあいだですね、イギリスから来たメディアの方がうちの取材をして、イギリスとアメリカ、イタリアで流す番組をつくと。来年以降、年明け早々に流すという噂は聞いております。

佐藤翔輔

録画したものを手に入れたいですね、使えそ

た後にホームページで一覧で見られるところがないかって探した時に、紹介できる英語のものがなかったっていうのがあって。震災なんでもたっけ、ホームページありますよね、一覧がつけられてる。

佐藤翔輔

「震災伝承施設一覧」ですか。

参加者 A

それを一応送ってあげたんです。でも、やっぱり英語のページがない。頑張つて探したんですけどなかったたので、そういう取り組みがそれぞれの施設であるのかなっていうのを聞いてみたかった。

佐藤翔輔

ありがとうございます。伝承ロードの「震災伝承施設一覧」では英語版はないけれども、各個別はどうかってことですね。仙台市はあったから見れたってことですかね。

参加者 A

仙台市も同じでホームページでは無かった。パンフレットは英語版のPDFが。

佐藤翔輔

あつたということですね。四つの施設に英語や、多言語に向けてどうしてるかを順番に。

柳谷

メモリアル交流館と荒浜小は展示スペースに限りがあったので、それを補うために展示内容を英訳したパンフレットを用意しました。その

うですね。では齋藤さんお願いします。

齋藤

岩手県の東日本大震災津波伝承館ですが英語のパンフレットはたいま準備中です。館内の展示については基本的には英語は併記しております。あとは中国語と韓国語はスマホで見られるような対応になっていて、4か国語には対応しています。解説員がおりまして、日本語と英語と中国語のスタッフがおります。

佐藤翔輔

スタッフの中に喋れる方がいる。

齋藤

英語を話せるスタッフと中国語と。

佐藤翔輔

それは採用する段階で。なるほど。じゃあ、給料もちょっといいのかもしれない。そうでもないですか。ちょっとだけ。ありがとうございます。ジェスチャーで答えていただきました。ありがとうございます。瀬戸さん、事情が違うかもしれないですけど、海外向けにどうされてますでしょうか。

瀬戸

まず県で整備してる伝承館は、個人的な想像ですが、多言語対応するのではないかなと考えています。自身の経験を申し上げますと、ジャイカの研修を何回か引き受けてまして、アフリカとベトナムとウクライナ、ロシア。アフリカは辛うじて英語が通じたのでそのまま行けたんですが、ベトナムとロシアとウクライナは英語

他には仙台市内のメモリアル関連施設、メディアテークや東北大学災害科学国際研究所も含めて紹介する1枚もののパンフレットも作成しています。最初は英語だけでしたが、開館からしばらく経った後、国のインバウンド関係の交付金を活用し、市内の海外からの訪問者数の多さに合わせ、中国語の繁体字・簡体字、タイ語、韓国語も追加しました。ホームページは荒浜小の場合だと、PDFで英語の施設展示のパンフレットをダウンロードできるようにしています。あとは、観光関係の部署でインバウンドのために海外発信用の英語版のウェブページをつくる際、メモリアル交流館や荒浜小もその中で掲載してもらったこともありました。

佐藤翔輔

今ここに荒浜小のスタッフさんいますよね。どうですか、海外の方の対応は。

参加者 B

ジャパニーズオンリーでやってるので、予約の際に基本的には通訳の方の同行をお願いします。

佐藤翔輔

スタッフの中に外国語喋れる方いませんでしたっけ。

参加者 B

1名ポルトガル語が喋れるスタッフがいます。ただ英語は本当に片言で何とかという形で対応しています。

佐藤翔輔

通じないんですね。ジャイカさんが連れてきた通訳の方が英語からウクライナ、英語からベトナムはできるんですけど、日本語から英語っていうのはできない方に当たってしまっていて。私、埼玉出身なんですけど、埼玉出身の私が福島県川内村の方の方言、聞きやすいんですけども、それを聞いて私が拙い英語に直して、その拙い英語をさらにまた別の言語に直すと。伝言ゲーム状態になってるので、果たして最後まで正しく伝わってるのかどうかは確認のしようがなく、若干不安になったと、そういう経験はございます。

佐藤翔輔

ありがとうございます。筑波さん、山崎さん中越ではどうだったんですか。

山崎

海外の方が来る場合は基本的に事前の予約の際にうちは多言語化できているとお伝えして、通訳の方を同行されて来るというのがほとんどでした。パンフレットと施設案内に関しては「協力いただいて英語に直して、印刷はしてませんが、PDFになっているものをコピーしてお配りする」という対応です。

佐藤翔輔

筑波さんは他に付け足すことないですか。

筑波

山古志の場合はリニューアルをかけて対応できる展示にしたんじゃないかなかったですっけね。

佐藤翔輔

ありがとうございます。私から補足させてい

ただきますと、仙台市が今やってる取り組みなんですけど、主に東北大学の学生なんですけど、複数の国の留学生を募って、彼らに東日本大震災のことを荒浜小とメモリアル交流館で学習してもらって、自分たちの国にとってどんな部分を受け入れやすいかを抽出してもらって、それをパンフ化、映像化してもらおう仕事をしています。受け取る側の文化が違うとストレートに伝えても伝わらない部分があるんですね。私、その講習を担当させていただいたんですけど、「緊急地震速報って何ですか？」から講習が始まるんですよ。だから、日本のベースを理解した上で、彼らが自分たちの国との差を見ながら興味深いところを選定してくれて、表現する媒体をつくってくれている。ご質問ありがとうございます。

実は

よくわからなかったんです

では続きまして、「専門用語をできるだけ使えないようにはできないのでしょうか、実はよくわからなかったんです」というご意見。補足をお願いします。

参加者 釘子明

私、陸前高田で語り部をします釘子明と申します。よろしくお願います。私、ホテルマンを30年やってたんですが、お客様に説明する時に専門用語を言うかわからないんですよ。今日も専門用語が何件か出てきたんですけど、そうするとですね、そこだけで聞くのが嫌になっってしまう。講演なんかでもそうなんですけども、この場の先生方も専門の方々だけがいらっしゃるので、専門用語を言ってるんですけども、3・

11東日本大震災を伝える上では一般の方々によりわかりやすく専門用語を省いた簡単な言葉で伝える、これは外人の方に避難という言葉とか、そういったことをうまく伝えるっていう意味でも非常に重要じゃないかなと思ってるんですよ。そこをぜひですね、議論をお願いできればなと思っております。

佐藤翔輔

例えば今日出てきた言葉でわからなかった言葉だと何がありますか。

釘子

英語かなんかで三つ出てきたのがあった、たぶん瀬戸先生かな。意味がわからないところが出てきた。そういったところを専門用語ではなくてわかりやすい言葉で、私はまったく英語はわかりませんので、伝えていただいたほうが非常にありがたいんじゃないかなと、考えてました。

佐藤翔輔

ありがとうございます。今のことについてうちではこんな工夫をしますとかつてありますか。

瀬戸

工夫といえますか、先ほどのスクラップアンドビルド、リコンストラクションは強調したので、わざわざ英語にしたというところとして、ちょっと不適切だったのかなと。ただ物ごとを正確に言おうとすると、やたら専門語が出てくるんですね。ぼやかすにつれだんだんよくわからなくなっていくので、正確に物

事を発信しようとする専門語になってしまう。で、より広く伝えようとするとなんだかよくわからないものになってしまうという、そういう辛さっていうのは感じます。

佐藤翔輔

そうですね。表現したいものが表現できなくなっちゃう。専門性って高すぎても低すぎてもだめだし、ましてや英語なんてみたいなみなさんの展示の中で一番難しい言葉って何ですかね、スクラップアンドビルドありますか。ポトルネットワークとか。陸前高田だと地球物理とか、津波のこともちゃんと展示で記述されてるじゃないですか。あの中でそういうのありますか。

釘子

10回近くお客さまを案内していたんですけども、わかりやすく、映像でもそのまま地元の方々の言葉が入ってるのでイメージが沸く。それは気仙沼でもそうなんですけども、実際に沿うような形で模擬体験ができるのは非常に良いことだと思います。ただ言葉っていうのは先ほど言った通り、難しい言葉が入ってしまうと聞けない、聞きたいんだけど聞けないっていうのは結構あります。私たち勉強したいので、優しく教えていただくと大変ありがたい。

佐藤翔輔

施設の中にはそういった体験はなかったことでですか。

釘子

そうです。

佐藤翔輔

ああ良かったです。今おっしゃったことで良いと思うのは、誰かしらが翻訳者として間にガイドとして入ってるわけですよね。そういうことが大事だとおっしゃっていたんですね。ありがとうございます。

批判的な意見は

ありましたか

次の質問ですね、「施設、活動に対して批判的な意見はありましたか、どんな内容でしたか」って書いた方、どなたでしょうか。

参加者・二上文彦

私、南相馬市博物館の二上と申します。震災から9年を迎えると少なくともなってきたいるのかもしれないですけど、特に自ら被災して、例えば身内を亡くした方から、震災をこういうところで取り上げるのはどうなんだ、そういうふうに表示するのはどうなんだという反応はないでしょうか。

地域の方達と

どうやって合意形成

例えばうちだと震災を直接取り上げた展示はやったことないんですけど、震災後の生き物を紹介する展示の時に津波の写真を使ったんですね。マスコミが取材にやってきて津波の写真を大写しにするわけです。そうすると、それをニュースで見た市民の人たちから、特に身内を亡くした被災者の方から、そんな展示やっ

が一つ。意見が分かれていたのは住宅基礎の跡を残すことだったんです。これから跡地利活用事業が進むと、また風景が変わっていくてしまいうけれども、ただそこには暮らしがあったてことを伝えたい。なので市としては住宅基礎の跡を残したいとアンケートを送った。その時に、「住んでた場所が悲しい場所のままっていうことは辛い」という意見もあったので、住宅基礎については少し時間を置き、残す範囲も限定的にして、整備をしたという過程があります。

保存を決める前の段階で、荒浜小学校は多くの方が助かった場所だからと「希望の象徴」という言葉が使われたときがありました。その時に、「自分の息子が亡くなった場所を希望の象徴とは言ってほしくない」という遺族の方の言葉が紹介された新聞記事がありました。そのような出来事があったこともあり、多くの方が逃げることでできたという事実は伝えるものの、必ずそこでお亡くなりになった方もいるっていうことを案内のなかでは伝えるようにしています。また、整備過程で遺族の方との面会の機会を持たせていただきながら、ご理解いただいた上で公開をしました。

メモリアル交流館も、被災した地域から移転した方が、身近にお住まいになっている場所です。オープン時に開催した企画展示では、いろんな震災の資料も扱っていて、被災の大きさを伝える津波でひしゃげた看板などを扱っていました。心情に配慮して、それらの被災物も2階の展示室に入った瞬間には見えないようにして、展示室の奥の小窓を開けると震災直後の様子を写した映像とともに見えるという形で展示したこともありました。その時にす

他の遺構を見ている、そこでお亡くなりになった方がいるかどうか、その後に残すか残さないかも含めて重要な部分だと思っております。荒浜小学校は周辺では多くの方が亡くなっている。ずっと避難誘導していた消防団の方が昇降口の目の前で亡くなってしまった。荒浜小学校の児童も1名、家族が迎えに来た後に亡くなっています。ただ多くの人が、荒浜小学校に逃げたから助かったということがあったし、地域の人にとっては思い出の場所ということもあった。整備前に、元住民の方に遺構保存についての賛否を聞くアンケートを取りました。メモリアル等検討委員会でも震災遺構の必要性は議論していたものの、やはり保存するかどうかの最終決定は、元々お住まいだった方に郵送でアンケートをお送りして意見を聞きました。そこで概ね賛成が得られたっていうの

ごく意外なことがありました。元々蒲生に住んでらっしゃった方が展示を見に来たときに、震災直後、数件の家が残っている映像を見て「懐かしい場所だ」と喜んで方がおられたんです。それを展示する過程でも、蒲生にお住まいだった方が集まる場所におじゃまして「このお家の人知らないですか」って聞いて、「ここはあの場所だ」と会話がはずんだり、その後その家の所有者の方にたどり着くこともできました。被災後の凄惨な写真であっても、その場所は復興事業のなかで区画整理が行われる予定の場所であり、そこにあつた暮らしの痕跡もなくなってしまう。だから被災後の状況の、街の痕跡が残る状況を見て、懐かしいと思う人がいる、そういうこともあるんだなと思わされた出来事でした。

佐藤翔輔

「遺族であるっていうことで、批判を向けてくるかもしれない方が特定できていて丁寧なコミュニケーションが取れたのが仙台市ですね。じゃあ克美さんいかがでしょうか。

佐藤克美

批判的な意見っていうのは私が館長になる前の立ち上げの時にはないと聞いています。記録を読む限りでは、この遺構に関しては先ほど説明をさせていただいたように地元の方々が残してほしいと。誰も亡くなっていないっていうことで。そして一番は先ほどのPVで見ていただいた杉ノ下地区、90名ほどが亡くなっているあの地区の方々、遺族会の方々も反対していません。市を恨むことはないっていうことも言っていて。遺構が残り、ここに杉ノ下

災害と ミュージアム

地区があつたんだということを証明できるものをつつ残してよかったというのが理由なのかなと。批判的な意見というのは私は今でも聞いていません。ですから、私からはちょっと何とも言えないのかなと思います。

スタッフの中に地域の方が

佐藤翔輔

ありがとうございます。さっきおっしゃったんですけども、建物自体は亡くなった方はいないんですけど、100mぐらい行くとたくさんの方が亡くなった地域があるのがこの階上地域なんです。実は伝承館のスタッフの中に地域の方がたくさんいるんですよ。

佐藤克美

はい。うちのスタッフにもいますし、語り部の方にもいます。さっき言った「お父さんに気を付けてねって言って別れた後、そのお父さんが津波に流された」方、そういう方々が、地元の方々为本場に一生懸命ですね。今、屋上に上がると杉ノ下地区は田んぼと畑しか見えないんですけど、その人たちはあそこに家があつたんだってことが今でも言える人たちです。うちはそういうのを伝える場所なのかなとは思っています。

佐藤翔輔

そういう方たちがなぜ向き合っているのかって、私も関心を持ってこれから見守りたいと思います。どうもありがとうございます。齋藤さんのほうはどうですか。まだまだわずかな期間ですけど。

現場にある意味

齋藤

立ち上がりから関わってはいないので、詳しいところは言えないんですけど、建っている場所がそもそも津波に襲われた場所です。現在も津波の危険エリア。まずそういうところにつくるのがどうなのかという批判があったと承知しております。それは今でもそうだと思います。ただやっぱり現場にある意味というのもあると思いますので、そこに建つことは決まった。あとは津波の映像を流すことについて懐疑的な意見をいただくことはあります。津波の激しい映像は当館の一番奥に流すことにしていて、それは導線を外して通れるようにしたほうがいいということ、そうしてあるんですね。ただそれも、それを見せないとやっぱりわからないという意見ももちろんありますので。色々な意見をいただくことはあります。

佐藤翔輔

あるけども、「批判覚悟でやっているとどこもあるということですね。ありがとうございます。瀬戸さんはありますか。

瀬戸

特段ないです。申し訳ありません。

佐藤翔輔

わかりました。中越でそういう現象起きましたか。筑波さん行きましようか。

そんな施設 shouldn't

復旧復興の様々なプロセスの反省点

参加者・紺野文彰

3・11メモリアルネットワークのシンポジウムの中で、兵庫大学の室崎教授が言ったんですね。その時の課題は「語り部として何を語るべきか」ということでした。基調講演で語るべきことは二つあるんだって先生は言ったんです。一つが災害そのものから学ぶ教訓。二つ目が復旧復興の様々なプロセスの反省点があるだろうと。そこからの教訓も語るべきであると。阪神淡路で大変な思いをして、神戸だとか仮設住宅での生活などを経て町をつくったんだけど、やはり反省点があったんだと。2番目の教訓については我々全然学ばなかったと。結局それが東北の震災にまで至っているということなんです。我々が語らなきゃいけないのは1だけじゃなくて、2なんだということを基調講演で話された。私は納得しました。私の質問はそれに関してです。みなさま方の伝承館では、どのように2番目の点に触れているのか。恐らく触れてない場合が多いだろうと思うんですけど、特殊な目的で展示されているのか、必ずしも二つとも全部入れなきゃいけないってことはないと思うんですが、それに関してどう思われるのか、どうされているのかということですか。

佐藤翔輔

今日、冒頭で筑波さんのこの事業の主旨説明に「いのち」と「くらし」に向き合うという部分があって、たぶん今の「意見は「いのち」を扱うことは多いけど、その後の「くらし」についてはどうなのかっていう「くらし」にもつながります。

筑波

山古志に施設をつくった時、震災から7年目のオープンメモリアル回廊は目指したんですけど、山古志は3年間の避難生活、全村避難があったのでしっかりと議論する時間が短かったっていうのもあって、7年目にオープンしますよって言った時にそんな施設 shouldn't じゃないって言うのがある。なので、そもそも施設自体 shouldn't じゃないのが最初でした。妙見とか木籠っていう土砂崩れを起こしてしまった現場を保存しようという話は復興ビジョンにもあったんですけど、それも地域の人とか市民の方たちからはほぼ反対意見しかなかった。そういう現場を見たくないっていう意見、保存の前に復旧だろうとか、俺たちの生活のほうが大事だろうっていう意見がほとんどで、保存っていうことを我々の師匠の平井先生が言うのと、翌日の新聞に「何が保存だ、よそ者め」みたいな投稿があった。最終的に当時の長岡市長が責任をもって復旧をすると。ただし、現場保存については将来に残すべきなんだから任せてほしいっていうことを言い切った。現場で亡くなった遺族の方にも市長が最初に「挨拶に行つて、あそこは意味ある場所だから残させてください」と。みなさんが手を合わせる祈りの場所が必要だから、整備させてくださいっていうのが水面下であって。市長がそれだけやってくれるんだからってことで、役所の人達も我々中間支援の人間もやれたっていうところはあった。最初は本当に反対しかなかったような感じですね。

佐藤翔輔

やり方によってはそれを諫めたり、宥めたり

それぞれの施設いかがでしょうか。

複層的な視点を踏まえながら

柳谷

仙台市については復興計画期間を5年と位置づけ、実施事業の事実についてはいったん5年間の記録誌としてまとめたり、市の復興事業に関することもメモリアル交流館や荒浜小の展示にも含めているところではあります。ただ、それがじゃあどうだったかっていうところまでは展示で伝えられていないです。例えば現在も私たちの所属では、エスノグラフィ調査という災害対応・復興事業に関わった職員にグループヒアリングなどをして、個人個人の目から見た視点で、当時どういう出来事があった、今どう感じているかの聞き取りをしている。また、震災から10年に合わせて、様々な立場の方へのヒアリングも振り返り・発信する事業も予定しています。複層的な視点を踏まえながら、この10年がどうだったかっていうことを捉えられないと、行政目線だけになってしまう。今時点ではまだ検証結果が伝えられるタイミングではないんじゃないかなというの、個人として感じる正直なところですね。

10年とか、15年とか

佐藤翔輔

うちのほうも同じくあくまでも震災について展示していて、復旧復興についてはワークショップや講座、視察での話で今の気仙沼市の復興状況を説明できるようにしています。そしてもう一

はあると。現在はどうなんですか、その方たちは。

ある意味では認めてくれてる

筑波

妙見に限っていうとやはり運営には参加してもらってないです。妙見にメモリアルパークができるので、公園の整備や、近くのバス停の日常的な管理をやってもらえませんかって言ったら、我々の集落には神社が2軒あってそっちで人手取られちゃうから、新しい公園にはとてもじゃないけど人を回せない。残念だけど、やるべきこともわかるし、あなたたちが大切に思っていることもわかるし、我々も大切だと思うけども無理だ。そう言ってるわりに、バス停を綺麗に掃除してくれたら、公園が草ぼうぼうになつてくると電話くれたりとか、あるいはメモリアルパークのバス停は新しいものができたのに、自分たちの集落側のバス停は汚れてきているからってペンキ塗り変えてくれたりとか、ある意味では認めてくれる。その分、そこに至るまでには我々も何度も足を運んでるんですけど。

佐藤翔輔

「批判の先にいるんな協働があったということですね。今のような回答でよろしいですか。どうもありがとうございました。

次はですね、「災害については触れてますが、復興計画等々についてはどうなんでしょうか」って質問いただいた方どなたでしょうか。後ろにマイク渡していただいていいですか。補足をお願いします。

つ、今仙台市さんがお話したように、復興記録誌というものを市でつくっていくべきではないかという話し合いをしているところです。これができるから記録誌をどう展示していくかっていうのを考えていかなければいけないのかなと。だから、まだ復旧復興しましたというゾーンをつくるのができていないというか、ないのかなと。神戸も実際に25年ですよ、今度で。あちらも8年、9年でそれを考えてはいなかったと思うんですよ。10年とか、15年とかの時に復興についてどんどん乗せていったのかなと思いますので、うちの方としても復旧復興については新しいゾーンをつくっていくのかなとも考えています。実はまさしくそれをやろうとしてるところなんです。ですが、まだ公表はできていない、ここでも言えないので、今のところはそういうことでよろしくお願ひします。

振り返って常設展示になつていくまでには

齋藤

仙台市、気仙沼市と同じようなイメージで、岩手県でもやりつつはあるんですけども。伝承館も「復興を共に進める」ゾーンとタイトルはあるんですが、その展示はほぼできていなくて。企画展示なり、何か事業として今の状況を紹介することはできるのかなと思っはいるんですけども、復興がどうだったのかを振り返って常設展示になつていくまでにはまだ少し時間がかかるのかなというところですか。

災害の教訓が活かされたか

オープンディスカッション

災害と
ミュージアム

災害の記録を残すことの目的の一つが、その前の災害の教訓が活かされたかの検証だろうと考えています。復興というよりは災害直後のですね、ボランティアの受け入れとか、避難所の運営においては熊本地震で、どうやら福島ではなく神戸の経験が活かされたようにだと熊本で伺っております。これは同じ都市直下の地震ということと似たような状況にあったので、福島の経験よりは阪神淡路の経験が活かされたと聞いています。具体的にどうだったかっていうところまでは伺ってませんが、そういった意味では昔の教訓、経験がのちの災害に活かされた例もあるのかなと思っております。

佐藤翔輔

じゃあ、中越どうでしたか、復興の部分の表現ですね。

復興とは何か

山崎

復興とは何かということから考える研究会も立ち上がるぐらい中越のみなさんは災害当時のことも復旧の流れのことも大切にきてきて、その先の復興とは何かっていうのを本気で考えながらこの10年15年を過ごしてこられた人たちがたくさんいるんだということがまず一つあります。その中で地域の人たちが自分たちの地域でどういう活動をしてきたのか。震災直後もそうですね、毎年地域で行われる盆踊りを復活させるためにはどう活動してきたのかとか、伝統文化を次の世代に伝えるためにはどうしたらいいかっていうことを考えてきた。そ

ういう中で一つ一つ丁寧に語り継いできた、行動で示してきたのが中越の人達なんだなというふうに思っています。

次の行動

さらに語り部さんが復興からのプロセスを伝えているというのがありまして。中越の語り部さんは震災当時どういう体験をしたのか、自分はどういう行動で避難してきたのか、避難所でどういう体験をしたのかっていうお話しもしますが、その後ですね、だからこそ自分たちの町内会ではこういう取り組みを始めるようになったとか、だからこそ、こういう備えが大切なのでみなさまにお伝えしたいんですっていうふうに、次の行動を皆さんにご紹介するような語りをする方が多いと思っっています。

さらには展示で言うならば年表がありまして、毎年更新できるようにスペースをたくさんとっています。ですので、震災当時1年後2年後3年後はこういうことが起こったけれども、15年経った今年はこういう復興のイベントが行われましたっていうことをどんどんと展示の中に追加していきながら、語り部さんが来訪者を案内してきた時にはいや実は去年こういうことがあってね、私もそこに関わったんだよっていうようなお話ができる、そんな展示リニューアルが細々ですが行われている施設もあります。

どういう9年を歩んだのか

筑波

チラシを入れさせていただいたんですけど、福島県博で毎年「震災遺産を考える」っていう

から生まれたものも合わせてお伺いできればと思います。

佐藤翔輔

ありがとうございます。じゃあ逆から行きましょう。山崎さん。どんなことを箱以外でやって、ソフトとしてどんなプログラムがあって、どれがお気に入りですかでいいですよ。

住民の中から生まれたこと

山崎

いっぱいあります。中越自慢したくて仕方がないんですけど。東北にも共通して言えることかもしれないんですが、地域の方との直接の交流、ふれあい、生の声を聴くっていうのが一番大切だと思います。その中で住民の中から生まれたこと例えば、例えば小千谷の住民の人たちは自分たちの経験をちゃんと語り継いでいきたいということで、震災後に立ち上がったNPO法人のみなさんが語り部をされています。山古志では震災でいろんな人から応援していただいたので、そのことへの感謝の気持ちと、自分たちが今こゝまで元気になりましたよっていうことを来ていただいた方に伝えたい、自分たちの手づくりの御馳走でもてなしたいというところで、地域のお母さんたちがレストランを始めたという事例があります。いつも団体でおじゃました時にはそのお母さんたちが料理の説明もしてくれまして、みなさんのおかげで私たちはこゝまで元気になりました、ありがとうございますという気持ちとちゃんと言葉にして伝えてくださるので、私はいつも中越に行くとその定食屋さんにみなさんを案内するんですが、そういう

展示をやっています。毎年2月から4月にかけて、震災の時に壊れてしまった時計だとか、要是震災によって生み出されてしまった資料を展示してるんですね。それらは震災の時を伝えるものだったんですけども、資料だけだと時間が止まってるっていうこの9年間を表現できないので、今年度は新たに関係者にインタビューして、「この9年どうでしたか」と話を聞いた上で「こんなことやってますか」というのを加えた展示にします。なので、今までは資料ばかりが展示されてたんですけども、今年は資料っていうよりはパネルの展示になって、その人がどういう9年を歩んだのかっていうようなものを加えてみようと、実験的なことをやろうと思っってます。まだ取り組み始めたばかりなので、これが復興だっっていうところまではいかないのかもしれないんですけども、ちょっと試しに始めてるっていうところですね。

20年とか、

30年ぐらいのスケール

佐藤翔輔

全体的に現在進行中であって、こうだったものがなかなか表現しづらい、これからやろうとしてますっていうご回答だったかなと思っます。私も実は宮城県の事業でお手伝いをしていて、さっきのお話のように中越では復興とは何かってことを体系的に整理する委員会とか研究会があつて、それを真似してやってみようと思ったんですが、ご破算になってしまいました。資料を集めたり議論したりしていく中で、今それを整理するのはできないねって、まだできてない（東日本大震災にとって10年はまだ早い）と

た活動も始まっています。あと、ばあちゃん達に自分たちがつくった野菜がこんなにいるんなのに美味しいって思ってもらえるんだっていうことに気づいたので、道端で直売所を始めるのかなですね、大きな動きではないんですけど、身の丈にあった自分たちのできる精一杯の恩返しというか、お礼の仕方を考えて行動に移してるっていうのがとても素敵なところだなと思っっています。

防災学習で言うところ新潟県は防災教育プログラムというものをつくりまして、県内の全ての学校に配布できるように、水害、土砂災害、地震、雪害、原子力災害、この五つの災害に合わせて1冊ずつ本をつくって、学校の先生方に防災教育の参考にしていただきたいっていうものをお配りしました。お配りするだけだと、先生はパラパラと見て本は棚に隠れて何年も目のを見ないっていうことでもありますから、モデル校を決めて、県が予算的にも人的にも支援をして、少しずつ県内で防災教育を広めていこうという活動もしています。そういった活動に対して、今度は中間支援組織が学校と地域をつなぐお手伝いをして、地域住民がそこで語り部として自分たちの体験を話すとか、防災の取り組みについて子どもたちと一緒に考えるときか、そういう仕組みが生まれています。

佐藤翔輔

ありがとうございます。瀬戸さんありますか。

故郷の記憶を

忘れないための

瀬戸

まだ箱がないので、箱と連動するプログラムも

いう事情もあります。阪神はたぶん10年である程度表現できるころがあつて、東北は20年とか、30年ぐらいのスケールが必要なのかなというふうに思っています。質問ありがとうございます。

最大限伝えるために

時間の関係で最後の質問になってしまいかかと思っいます。三つ書いてくれたうちの二つ目だけご紹介しますね。「震災の記憶と教訓を、未来の命を守るために最大限伝えるために、展示以外でどのようなプログラムを展開していますか」と。「その中で効果的だったり、有効だったなと感じるものは何ですか」って質問書いてくださった方、手を挙げてください。ありがとうございます。

美術館ですとか 生涯学習施設も

参加者・高田彩(委員)

普段美術館の運営ですとか、芸術活動を行っている高田と申します。各施設で取り組んでいる防災学習のプログラムをまず教えていただきたいのと、その中で効果的なものを教えていただきたいです。というのも美術館ですとか生涯学習施設も、防災センターですとか震災遺構の施設を活用するプログラム開発だったり、地域住民を巻き込んだのプログラム展開っていうのができるんじゃないかと考えておりますので、そういった意味でも参考させていただきたく、事例を教えてくださいなと思っいます。山崎さんには特に中越の事例で、地域住民が主体となり、語り部の方々も積極的に活動してるというお話があつたので、そういった地域住民の中

ていうのはないんですけども、福島の特性上まだ帰れない方がいらっしやるんですね。なので、自発的に地元の方から出てきている動きっていうのは故郷の記憶を忘れないための取り組み。つまり、避難先で育った子どもが自分が一体避難先の子どものなか、避難元の子どものなかからなくなっちゃう時がある。そういった時のために、例えば字誌みたいなものをつくったりとか。

佐藤翔輔

字誌。

瀬戸

字誌ですね。市町村よりもっと下の単位、集落単位の地域誌をつくったり、紙芝居をつくったり、あるいは昔話を集めた本をつくったりという活動が出てきています。こういった活動が原子力災害という中において効果的に子どもたちのアイデンティティの確立、地域に属しているっていうアイデンティティの確立に効いているのかなというふうに思っいます。

佐藤翔輔

ありがとうございます。

齋藤

岩手県の伝承館ですけど、まだ開館してから3ヶ月で固定のプログラムはできていないです。展示に関連してワークショップをつくりたいということで試作をして、学校で団体利用をいただいた時に試してみたりという状況。試しながらですね。県としては県の教育委員会です岩手の復興教育プログラムというのがあ



りますので、教育委員会と復興教育の中でどういった連携が、連携って言っちゃってしまいましたけれども、やっていけるのかということも相談しながらという状況です。

佐藤翔輔

克美さんお願いします。

望まれるものを

佐藤克美

気仙沼市の場合は、お配りしたリーフレットの中に入れていますが、この裏面で防災セミナーを案内しています。まず一番には語り部ガイドで語り部の話を聞いていただきたいなと。そして、防災セミナーという防災減災講座で、自主防災組織をどうつくるかという話をして。もう一つが東日本大震災における対応と課題。佐藤健一さんは震災当時気仙沼市危機管理監で、その当時の話なども約1時間たっぷり聞ける講座があります。

あとはワークショップですね。中学生、高校生の修学旅行用にはこのワークショップを翔輔先生と共に考えまして、展示を見て感じたこと、伝えたいこと、初めて知ったこと、やっぱりそうだったかということワークショップで発表させるといっワークショップも組んでます。

当館は、1周してくると最後付箋が貼ってあります。あの付箋は何かというところ、オープン前に見学した方から自分の気持ちをそのまま持って帰るのではなく何かに残したいという意見があり、模造紙に感じたこと伝えたいことを一言一言書いてもらって貼ったんです。そして、みなさんがいるんなら思いを残してくれて。批判

的なことが書かれたらどうしようかなと考えたんです。ですが、そういうことは一切なく、遺構の中の車を残してくれてありがとうとか、歴史を残してくれてありがとうというのが大半で、それをすべてデータにも残してさらに展示もするような恰好で残しています。

防災学習の効果的なものというのは今あげたものであって、防災学習を無理に来た人に押し付けてしまつと拒否反応を起すと思いますので、望まれるものをこちらとしてはメニューに。だから、振り返りワークショップは本来1時間ほしいんですが、30分で多くの方々がやっています。

佐藤翔輔

最初は克美さんからプログラムをつくりたいって相談されたんですね。いろんな議論をしたんですけど、被災現場である以上、実際の経験をした方から生でお話を聞くのと学んだことをどう受け止めるかを丁寧にやったほうがいいんじゃないかって結論に至ってそういう形に落ち着いてます。

そこに暮らしている人が

柳谷

高田さんの知りたいことともしかしてつながらないかもしれませんが、私自身施設を整備する過程で、過去の被災地に整備されている遺構やメモリアル関連施設を様々見に行っていたなかで、「現地の人に話を聞くことができる」ということは体験として大きいなと思いました。展示だけではわからない、いろんなことが感じられる。例えば、雲仙普賢岳で被災した大野木小学校。遺構は立ち入りできず外観から見る

施設とどう関わっていきけるか

高田

今日は貴重なお話どうもありがとうございました。地域住民がいかにかそういった施設を活用していくかという視点も大事にしないでいいなと思います。先ほどの質問をさせていただきます。素晴らしい施設ができて、地域住民の暮らしと接続されない状態で施設が運営されてしまいがちではあるかと思えます。暮らす者として生活者の視点でもう一度施設とどう関わっていきけるかを考えながら、今日はお話を聞かせていただきました。どうもありがとうございます。

佐藤翔輔

もうお一方はアーツカウンシル東京の佐藤さん。

ミュージアムを1つのメディアとして

参加者・佐藤李青(委員)

ライフミュージアムネットワークの実行委員会委員をさせていただいております佐藤と申します。肩書にあるように普段は東京におりまして、震災の後に東京から東北の文化面での支援ということ、岩手、宮城、福島3県と関わってまいりました。今日はミュージアムの話を知って、ミュージアム自体が何かを伝える場として生まれてくると同時に、これからミュージアムを一つのメディアとして語る人が必要なタ

状況ですが、隣接してる公が運営してるような場所の一部展示はしてました。私も行政の間ではあるものの、行政ついでついで行政目線で説明をさせていただきます。でも、住民側の暮らしも知っている、背景にはその過程でいろんな苦しみとかがあることもわかる。そこにNPOの方がお一人いて、予約してなかったんですけど案内してくれました。噴火の後、5年間ぐらい地域に戻れなかった。そして5年経って戻った後も、地域のことに関わっている方だったんです。当時の恐ろしさを伝える生の声、時間の経過、今現在の暮らしの状況とか、その一人を通じて展示だけでは気付かなかった視点に気付くことができた。そして、それは過去の出来事ではなく、今の時点でもそこに暮らしている人が噴火と向き合っているということも感じることが出来る出来事でした。

荒浜小学校でどういう人に勤めていただきたいかっていうことをオープンの際に検討した際に、市直営で運営することを決めて、スタッフを雇うするにも嘱託職員という制度しかないの、給料も安くして申し訳ないなと思いつつ荒浜地区で暮らしていた方や活動をされていた方々に嘱託職員として勤めていただくことにしました。現在は5名のスタッフがいます。客観的な当時起こった事実と、自分が感じてる地元への思いも含めて案内をしていただく構成にしたい、なるべく人に会えるような状況をつくっています。あとは、プログラムのにも宮城教育大学と連携して教員向けの資料をつくったり。先ほど翔輔先生がおっしゃっていた外国人留学生ガイドの話もですね。

切り口を変えて伝えている

イミグでもあるのかなというのを実感しました。私自身も東京から東北に支援をしていました。という立場でこの8年、9年語ってきたんですが、東北以外の場所での話をする時は東北の当事者のように見られるということが最近多くなってきました。これだけ時間が経つてくると当事者について議論していた幅が、それ以外の経験をしてる方にとってはさらに広がって、関わってきた者も当事者に見えてくる。そうすると自分自身にしても遠くのことを伝える時にミュージアムという場を使っていくようになっていくんだろうな。復興のプロセスの検証はこれからだという話もあったんですが、そういう意味でも、これから改めてより遠くの人も含めて多くの人にこの出来事に関わってもらう機会としても、ミュージアムが非常に重要なものになってくるのかなというのを今日のお話を伺いながら改めて感じました。ありがとう

メモリアル交流館の場合は、最終的には、災害から命を守る行動に行き着いてほしいけれども、交流拠点、沿岸部の玄関口ということ役割としてあります。1回施設を訪れて終わってしまうのではなく、繰り返し訪れてほしいということで、企画展をいろんな切り口でやっています。例えば消防職員の手記や、見に行った職員の話のインタビューなどを元に展示をしたこともあります。切り口が違うと例えば下水道業界の方が他地域から見にくるとか、他都市の消防局から資料を貸してほしいと連絡があるとか。同じ災害を扱うのであっても焦点を変えて伝えていることが一つ。あともう一つは交流館は玄関口で、実際の被災があった現地を訪れてほしい。で、現場に出てほしいので、貞山堀のことを紹介する企画展示では関連企画として、貞山堀で釣りの企画を開催したり。現場を訪れてもらい、現地の方と被災した地域の今ある魅力を通じて交流してもらおう。直接的に防災のことを扱っていないけれども、その地に足を運んでいただいて、土地のことを実感し、そのような交流をしているなかでぼろっと震災の時の話が出てくるかもしれない。そう切り口を変えて伝えているという感じですね。

荒浜小学校でどういう人に勤めていただきたいかっていうことをオープンの際に検討した際に、市直営で運営することを決めて、スタッフを雇うするにも嘱託職員という制度しかないの、給料も安くして申し訳ないなと思いつつ荒浜地区で暮らしていた方や活動をされていた方々に嘱託職員として勤めていただくことにしました。現在は5名のスタッフがいます。客観的な当時起こった事実と、自分が感じてる地元への思いも含めて案内をしていただく構成にしたい、なるべく人に会えるような状況をつくっています。あとは、プログラムのにも宮城教育大学と連携して教員向けの資料をつくったり。先ほど翔輔先生がおっしゃっていた外国人留学生ガイドの話もですね。

佐藤翔輔

ありがとうございます。メモリアル交流館の企画展は非常に丁寧に取材をして表現してますね。評判が良くてですね、丁寧なプロセスについていうのをとても大事にされてるんだと思います。では、最後主催者側からコメントをいただいて終わりたいなと思っております。お二方ですね、まずお一人目が杉村博美術館の高田さん。

うございます。

佐藤翔輔

ありがとうございます。ではですね、私から若干まとめたことばを話させていただきます。最初から申し上げますが、今日まとめるのは途中で断念いたしました。それに代えて、何でこういうことをしてるかっていう意義を最後申し上げたいなと思っております。

「忘れない」というキーワード

東日本大震災の時にあれだけ大きな津波、広い範囲で大変大きな津波があったわけですが、亡くなった方がいない地域であるんですが、ね。実は岩手にたくさんあるんですが、象徴的な例としてこの二つを申し上げます。普代村の

犠牲者ゼロの地域に着目した調査：慰霊祭の存在

- ・普代村太田名部地区
 - 昭和三陸での100名死亡
- ・洋野町八木地区
 - 昭和三陸津波で79名死亡

佐藤翔輔, 今村文彦(2017): 東日本大震災における「津波による犠牲者ゼロ」の地域を対象にした探索的調査, 地域安全学会 梗概集, No. 40, pp.181-182



※報告会当日は、ハザード現象と避難情報を重ねて、それぞれ3地域に分けた結果を表示

避難過程

過去の災害があったことを知っていたか

災害	大崎市鹿島台	大畑町	丸森町
1947年カスリーン台風	13	7	1
1948年アイオン台風	14	6	10
1986年8.5水害	49	42	65
2015年関東・東北豪雨	39	44	51

■知っていた ■なんとなく知っていた ■どちらともいえない ■あまり知らなかった ■全く知らなかった

オープンディスカッション

災害とミュージアム

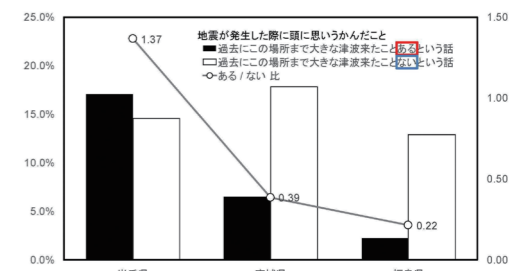
戸時代から毎年です。それを続けてるだけでもすごいなと思うんですけども、1982年、今から37年前ですね、その時にまた大雨が降って土石流が起きちゃうんですね。この地域と隣の地域が飲み込まれます。隣の地域は亡くなった方いるんですけど、この地域は亡くなった方がいないんですね。いかに忘れなかったことが大事かと。

もつと時間を最近にすると台風19号もそうなんです。台風19号、今回全体でかなりの方が亡くなってますけども、宮城の大郷というところ、大崎の鹿島台というところは吉田川が決壊してるにも関わらず亡くなった方がいないんです。かたや決壊してないところであれだけの方が亡くなってる場所もあるんですね。大崎の鹿島台とか、大郷は避難行動が早いんですね。過去の災害をどれだけ知ってましたかっていうと、関東豪雨は知ってる、どの地域も。で、あと昭和の85水害は東北で有名なんですけど、これもまあまあ知ってる。ただ知らないですよ、カスリーン台風、アイオン台風は。はるか昔の災害について多くの方が知ってるっていうのは鹿島台ということですね。(引用文献3)

記憶をつなげることがいかに難しいことか

今からお見せするグラフは衝撃的です。岩手、宮城、福島、東日本大震災が起きる前の過去の津波をどれだけ知っていたかというグラフになります。地震で揺れた時に自分の地域に過去に津波が来たってことを思い出しましたが、来ないってことを思い出しましたかということですね。「来た」と思いだした人は黒です。「来ない」とい

東日本大震災発生時点における過去の津波の想起(3県の違い)



佐藤翔輔、新家杏奈、川島秀一、今村文彦(2018)「東日本大震災の発生前における津波伝承に対する認識の地域間比較」『土木学会論文誌B(海岸工学)』Vol.74, No. 2, 1505-1510

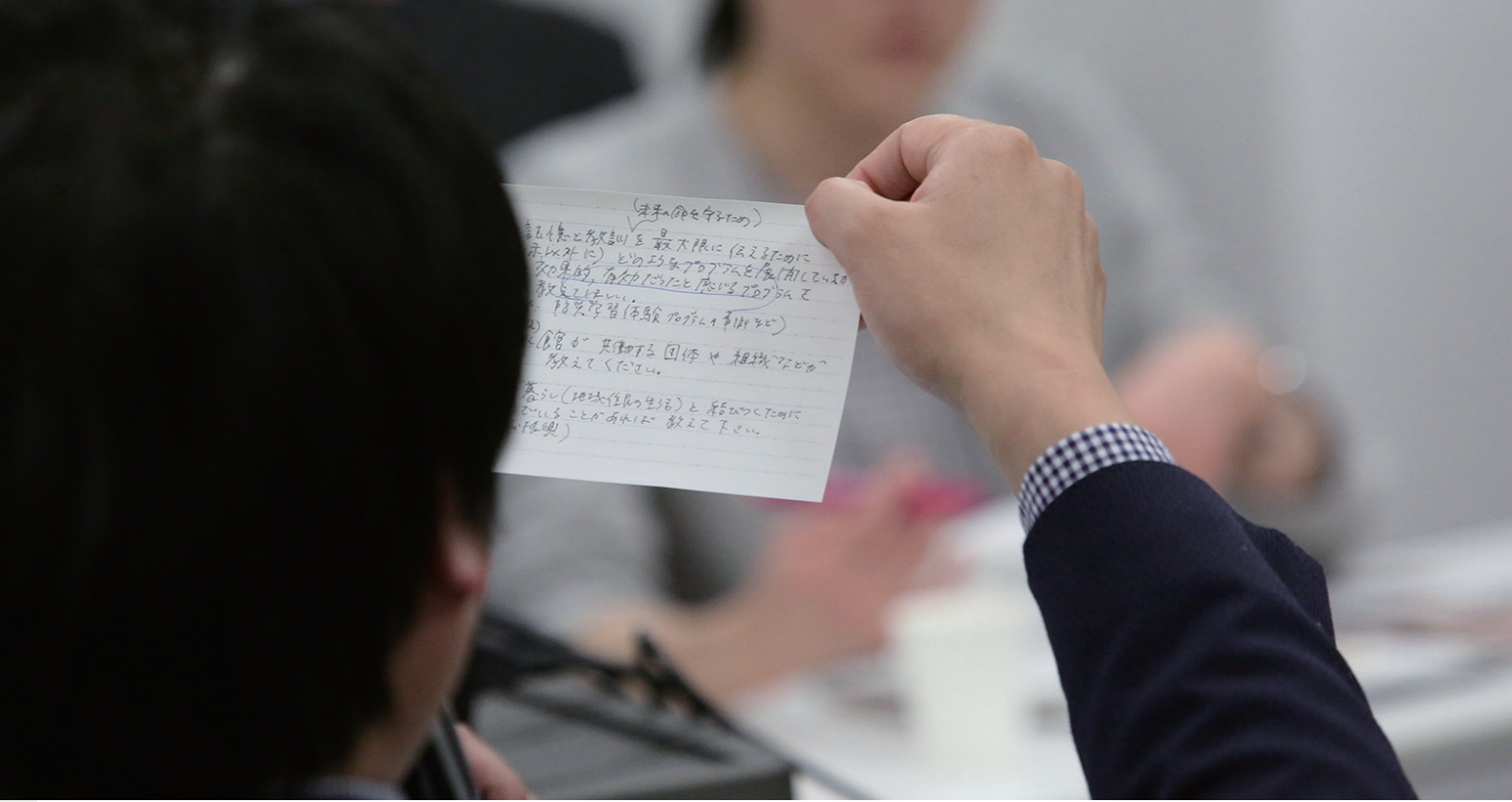
うのを思い出したのは白ですね。両者は岩手では同じくらいです。宮城、福島は、圧倒的に「来ない」ことを想起した方が多いわけですね。これは事実として岩手のほうが何度も津波が来てるっていうこともあるんですけども、これだけの記憶の偏があるということですね。今3県で見ましたけども、陸前高田と気仙沼でこまごま見たのがこれです。県単位でもそうなんですけど、地域によっても違うんです。地域ごとの差って何で生まれるかっていうと、高台移転が影響します。高台移転すると、その土地の記憶を忘れてしまう傾向が如実に出ました。福島は高台移転ではないですけども、そもそも土地を離れているわけですね。こういった場所で記憶をつなげることがいかに難しいことか。たぶん自覚されていることだと思うんですけども、そういった意味で、わざわざ宮城に来ていただいて、岩手の方も福島の方も宮城の方も呼んでいただいて、

こういった場をつくっていただく今日の意味と、いうのは大変大きかったなというふうに思います。(引用文献4)

途中で何かしら今日のまとめをつくりたかったんですけど、断念いたしましたので意義を申し上げることでまともに代えさせていただきますと思います。今日、「発言してくださいみなさんへの拍手を以て終わりたいと思います。どうもありがとうございます。」

【引用文献】

- (1) 佐藤翔輔、今村文彦：東日本大震災における「津波による犠牲者ゼロ」の地域を対象にした探索的調査、地域安全学会梗概集 No. 40, pp. 181, 182, 2017.6.
- (2) 高橋和雄、緒統英章：災害伝承「念仏講まんじゅう」調査報告書—150年毎月続く長崎市山川河内地区の営み—, 2013.7.
- (3) 佐藤翔輔：台風19号災害における宮城県内の避難行動、日本学術会議公開シンポジウム 令和元年台風第19号に関する緊急報告会、2019.12.
- (4) 佐藤翔輔、新家杏奈、川島秀一、今村文彦：東日本大震災の発生前における津波伝承に対する認識の地域間比較・評価、土木学会論文誌 B2(海岸工学) Vol. 74, No. 2, 1505-1510, 2018.11.



参加者の声

何を残し、何かを伝えるためにはまだ終わりも答えも見えないわけでなく、あの日のことに向き合い、ふりかえり、そこでの気づきや、発見を重ねて形にしていく作業を続けなければならないと思いました。(宮城県南三陸町、40歳代)

東日本大震災の被災地に次々と伝承施設が生まれているが、それぞれはつながりあうことで集客の力になるのか？それともライバルなのか？もう少し先を見てみたいと感じた。この何年かは新規性や物珍しさから人は来ても、人気の施設とそうでないところが出てきそうで心配になる。その意味で「何を残し、何を伝えるのか」はその地ならではの魅力がないと埋もれてしまうと感じた。伝承施設が多く誕生し、互いに連携しようとした流れは好ましいと思う一方、互いに差別化をどう図れるか、知恵を出し合う必要があると感じた。

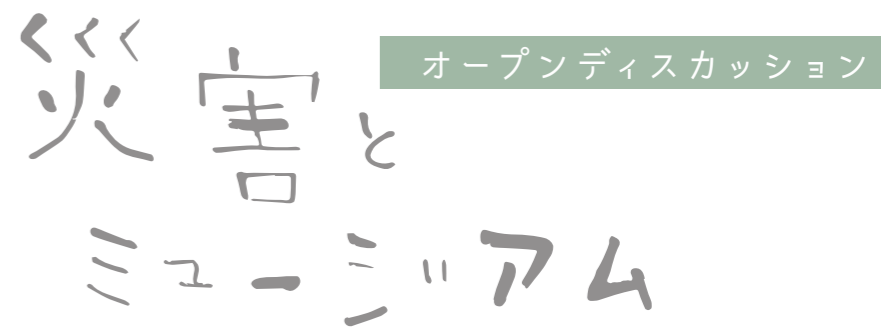
(宮城県仙台市、40歳代)

東北の復興はまだまだ続くのでしょうか。「忘れない」という事をミュージアムが伝えていなければならない重要性を感じました。(宮城県仙台市、40歳代)

今年、神奈川県内が台風により被災したため、どのように記憶、記録を残していけばいいのか被災後の今、学ばなければと思い参加しました。まずは地域・人とむきあい、できることから始めることが大切かなと思いました。

いろいろな人が自分事として考えていける取り組みだと思います。(神奈川県横浜市、40歳代)

震災遺構、残ったものと残らなかった(残せなかった)もの。なにが違ったのか、検証したら面白いと思った。やはりお金？トップの考え？(福島県南相馬市、30代)



オープンディスカッションには「災害とミュージアム」という傘の中に、大きく分けて二つの問いが含まれていました。一つは副題にもある「何を残し、伝えるか」、もう一つは「ネットワークとは何か」ではないでしょうか（その問いを、当日中に顕在化できなかったのは、ファシリテーターである筆者の至らない点です）。

オープンディスカッションの前半は、一つ目の「何を残し、伝えるか」について考える時間でした。柳谷理紗氏からは仙台市のメモリアル事業について、佐藤克美氏からは気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の内容・運営実態について、齋藤里香氏からは東日本大震災記録誌編纂の経験や福島県内における災害資料収集の実態について、山崎麻里子氏からは2004年新潟県中越地震の被災地でのメモリアル事業について紹介いただきました。この時間を通して、残しているもの、伝えていく手段を共有いただけただけで、前述の問いに対して具体的にこたえていただけました。対象や手法が異なっているにしても、東日本大震災を残り、伝えて、災害からの被害を減らしたいと願って活動していることは同じ志です。

ディスカッションの後半は、もう一つの問いである「ネットワークとは何か」を考える機会になりました。本事業が掲げている「ライフミュージアムネットワーク」の使命は、「いのちとくらし（いづれもライフ）に誠実に向き合うために、同じ志を共有するネットワークを強化・拡大する」とされています。本ディスカッションでの「ライフ」は「災害からのちを守る」「被災からのくらし」に当たり、これは今回の関係者間の明快な共通理解であると思います。肝心の「ネットワーク」ですが、様々な解釈・理論があるかと思いますが、大まかに言えば「同じ目的があって、共同することで互いにメリット・効果がある複数組織・活動のつながり」だと筆者は考えています。当日は、この「ネットワーク」という言葉について「連携」や「仲間」といった言葉で、質疑応答・議論がなされました。そのディスカッションの中で、著者なりに学んで考えたことを次に述べます。

前述の「互いにメリット・効果がある」という点が一番難しいポイントです。その原因をディスカッション中の各発言から組み上げると、(1)お互いを知らないこと（前述の「互い」の部分）、(2)現在の活動に要しているヒト・モノ・カネ・時間といった資源を供与してでも、それに見合ったり、上回る「メリット・効果」がなければなら

ないこと、(3)「互いにメリット・効果がある」方法のアイデアが浮かばないこと、などが挙げられます。この原因考察が妥当なものであるとすれば、「ネットワークを強化・拡大する」ことは、これらの原因をそれぞれ潰していくことであると言えます。

この問題を解決するには、組織間を横断する境界連結者（バウンダリースパナー）の存在が必要です。境界連結者は経営学における考え方です。様々な説明が必要ですが、ごく簡単に言ってしまうえば、境界連結者は、組織を超えて複数組織の資源を有効に活用して、新たな活動・事業を行う「つなぐ」役割をもつ人材のことを指します。本ディスカッション中に、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館で、地元中学校である階上中学校（の防災教育）、けせんぬま震災伝承ネットワーク（語り部の団体）と筆者の活動が共同している（ネットワークしている）気仙沼での事例が紹介されました。この共同・連携を例にとれば、階上中学校・菅原定志氏（令和元年度現在校長）が「つなぐ」存在となっており、境界連結者の役割を果たし、様々な活動が融合しています。この共同には、菅原氏（境界連結者）がそれぞれの立場の目的、相手が何を有しているかという資源（知識・情報を含む）を知っていたり、何を相談したり、頼ったりすればいいかを知っていることが大きな要因になっています。そこには、つなごうとするための境界連結者の踏み込む「足」とかく「汗」があります。

「ネットワーク」とは言うに易い言葉です。「ネットワーク（する）」は必須ではありません。「互いにメリット・効果がある」場面・状況があるからこそ受け入れられる手段です。そういった状況を見出したり、それを誘発する境界連結者としての役割や環境整備を「ライフミュージアムネットワーク」に求めていきたいと思えます。震災を伝えることは誰もが一生懸命にやっているからこそ、互いを知ったり、組織を越えようとするのは自ずと難しくなります。「ネットワーク」が機能するということは、「誰か」が複数の活動や団体に乗り込んで、よく知り、アイデアを生む境界連結者の役割を果たすことです。ネットワークの成立には、お互いを知る場が提供できて、一歩も二歩も踏む「足」と「汗」をかくことが必要であると考えます。

最後に、発表された方々、参加してくださった皆様、準備・運営してくださった実行委員会関係者の皆様にお礼申し上げます。